誹諧鑴　七

雪之部

新宿圖書

へ 5
1928
7

俳諧䉤七編

叙

䉤の七編なる。其意ハ前編ともの序にあらハせり。今流行の工業行鼇頭の大概にて。神祇山水郡部の地名。故事古歌にも物語。人名世話事おしへや。孝行忠孝禽獣に。梅花さくら牡丹。任弥和尚の察。譬喩に軍に風月花。雲鳥扇尾母に

へ 5
1928
7

僧。尼徒弟取次や児子瞽女。意ハ女房

舞子妓。娼妾に白拍子。賢女除限に

為へし也。云はけ秀句揃而。長句にて是

短句のまゆとる。判を掃る粉骨ハ。尤篤

のうちにゆするへしとぞ。

甲辰夏

晙叟

黄花菴

強羽来るへし

云らし

秋の露　浦の秋

まれ秋といふ座

と入て句中

まんまと仕立

て

京地　江戸地

賢女　松子

男歌　人名

いつきも句と

こ終る仕立し

深川湖十

氏神をわしぬけいせい

名ゝ湯をうい出の歎き

尤妻の傍乎麦飯の舎

鬼追の里ゝも命が松人

天のあまする中の純

田子の手田に出の国両

六祖の勝を出る美出

百川ハ何は隣の実

不二とさらの白き日が

愛生女子の節る荒所

杉田の松を江南の出

扇に画タ尔の文

折紙とまでみ吉文の果

人も仏も浮か浮が

隠 書とい吉
よし

十九日金も命もいりあくさ
八景の旗本をまもるむき堤
吉原川さくらに二季の高ねこえて
月も日もすめる佐野の百夜足
排人去と帰らすと思しけり
出ず画ときまず唐律の筆始
旅律国の古座に桜の路看
先之迄おぼしめ静の庭の山
扇さへつりはれきき植り看
舟南に萩のちきこむ鶴の辛
方角の人に随ふ一面書
似たるをと中吉原の帰路
高帰とかるとお訴も蘇夜
悪かる寄の廬山の炭二俵
煙柳も出口も同しおかしきて
蛍より火の光帳しき郷の秋

秋色亭

張﨟さるへし
見えとふつる花を
ひつりて
花く立の白まし
まかうえし
さう中寸出女の
男情とよく
云かるへし
燈 地名
原氏 艶中紙
つもくいせ物流
世らとうくまへ
く係るへし

田野菊

意春のうとく眠る此の檍
かぬかれて腕きその八女房く
か茶川に車のうる葵の日
三千の中をまつまる緑まく
去の白とうるとぶるとお置き
花原へ矢先のむかふ信ひ
玉川小町か門に出お取り
甘茶の初も竹の高に似て
国領 豆子うえもかまわり
中の町まきを活をつくりもの
山吹と頼れは若の悪夜いふて
かし衣ずくと詠みて気そえく
大ま簡と素人うして東山
七々のふも緑をとるうみ

詩と云ものゝまりて吟味見へし

多称りの森に啼く鳥へ下り蛙
玄ふりの多の寂卯し八京
白雲のことを梅と峰剣
は僧うしみて帰る旅人
端へ春しゝ烏ろい驚蝉
堯る古疎きむつらのうち
宗祇の詞の白ふ西行名
蔣手綴て情を湯涜の飛
悟宗ひつてとなまる香ら翁し
男あり呼を九十九て豊あ
故謡の鳥羽ぬけ名なり
女あるしの猫よ人の名
枝のいけ鐙しなりし歩波
入日とりん次宇の世さうり
新地あまなく飛まこり行り
昔の花咲く　素浦 佐用晒

暗窗

張楊泉人し
爲新
就く地名
石叔　寺号
云　甘多
黄門の言陳
おしかゝひて
金のんとおち
くる白石てし
あさつ梅の
見舞しるみ

山本吉雲

長明ゝ南高に掌作る杜字
暮三月只ハ毎さぬ子よ日
よしや世ハ本まち作ある春として
南を読作よ山荘の打ちる旅
大岸の母しよ程母か玄巨媛
姥ひとつ鏡撲の音を談色て
秋の花て見る涅て多の夕霧
清地よ屋住吉加との松の風
花ぬまさ日見ぬあるよみさくら
是にあて吉ハ吾孫子古加田よ似て
黒名しぬ單の中よ白柏子
歳ふ出る中よ大根の春おり
元日きて木辻ひつきとし是下り
格杉しぬ積よ中れ国見る

細かゝる佐き
どちのむと
見かう

夕兵の霜の盈てしまゝ拾ふ
九日茄子はまかりしの不二
田子の見田に處の図而
草鞋山へ入定の修法
錦国伯了黄にまかりし
埜嫁の人にかつしきの弥
無かろくそ新造を笑ふ
あまりうしみしろと一口
荒ましたる奈良茶こそ大仏
妾女も御九蔵でうら猫
相る内裏ちやの上の泡
十月ゐといふゐの芳賞
いつ二人高る泥坊か番
松明空て帰るさ長く
取詣の禅が床中の隠
賀茂の尺也の妻衣秋冬

雀堂

錦繍ちる一し
附と句の底八五
に及びて評物
入句評者の毛
に八月枠ありへき
なく
攝物　水辺
讀吟
寄るよし
かけ合せの句に
多物あり
詠出地名近世
物名ある斎物をし
能ひにあいよく

雀海一漁

飴白に花古沸運なひらく山
外しの松古芥帰の大安日
きうし寺青を花は裏の燦
咲炭の雲翠きろぬ五月所
尺遠の三うへむてまぬ生佛
枚化の未と耳は笑く勇取の望
不の陰をぶ色ぐぬり桃
琴譯し松古今年ハ臼は数
顔刈もえへぬ佃の心社の秋
梅うの中て食くて穂木黄
當て入る壺取み京亂の花守て
舟去とうある松戸の禿とも
紫陽花の下作みは脂咲て
本み絶穂に絶了栗のくる

ちらりと作りし新作なれども手柄あしきハよく割りと惟うへあ其迎の句と判じく作なあるしある点あり抄くしある句ありし下ありてしる句ハ元日点の内より稀なる作達御目並一枚摺高点の句とえて出しあつし

白雲の佃迄てま尾久の冥蓮切の一葉乳なる手の盞白面よ押なし蓮の岸へ寄り后花と帆の来て吟ふ　雛々さ茶稽ハらきれて色の　後出笑開てある神志の小薮秋作後洛ハ宮の子まみ春表咲て汲あて不打花浮き蓮のあ旧むの表年のこる朶苦為きハ袖む迎ふもる　萩たしかき柄子作の実ル宇治ハ蛍チ原る坂えら元の蓉チし戻るあさうはうき世よ游ハやしみ　廿梓打きる歩柱ま綃子あと書日の出しと蓮の　元日

雀婦人

強銘ありけりあらへし游しと之句のところよまうしと身へし
京名　鄙作
又数　見毛
名所　橋都
逸き涌くあまりろきう流らう八点子のあらと

園女

白雲よ虎る芳迎しきる手る人蛇よぬるとゑひ来して松々器本原町の二階渉しく浮秋あと茶の席の豚ハ嫁のあふくさ昼眠の子まる見せる　梅ろけあ好ま果偶田の渡のあるせあき残淡の体む附よハかし　こまりあり吊しぬ花の体の足　梅子田螺ハ本当ハ汐干のんぶく終日ハ底とほ麻の家まくらあ翁の礼云送る垣根あし惟やとはへハ芸つる出席を続あて活子をおとると去用亍八重石辰九稿もあり八かくしつ

大文字の火ハ西寺まで見えけりて
猟寄るを横手気のかゝるみまかれ
因極唄聴く天かすみ香るし
世を捨し尼もかなしく清山
たらけの本よりつりたる座の加
羽箒を猫に見るか中の居
紅葉ハ東寺嶽へと雀の庵丁
子の役またと総て仕立たる
鶴ハあたりは深秋の夜風呂
蓮を取けいふ鮮い池
競馬かつゝみ一二人勝る子
母ハ梓をもて追ひ寄りて迎へく
よみかへし凄き石山の墓
今ハさくらしる義を云も志賀
湯女を誘ふ見て途中をへて嫋
庫裏の日向ふ不化の系針

薫風舎

弱き方かゝりし
色ハ後きと
古のむとふう
又数　極的
楽器ハおいて
よし
京の鳴　地名
称和　音家
関　須テ
尼　御
其頃ハ秋より

高松箕古

又蛇子のまつりの油皿
笙吹く寺る住のつきし
井の戸へと扣けと琵琶のあたり
住もの あるにあわれあるかなと
蘭菊の紫古み中の声ふて
麻の口挑きてふ良の菊咲ぬ
る市の紅と尾花のさくれ咲
年ゆて其の桜みそうかへ星
春之月見れもなのある十五日
ある宿のあいさと咲けハ植の花
花しくわかれと怖いそうらし
みなみ凄き石山の墓
手仙探く浄室出る見ん
る医者の女車ひつくたみ京

む虫あれよ
蛇ハかまぬと云
あり
伶人のうへに
つまらく
まよし

気しく流きて夜ふかる俗なやらの声もかまぬひ京秋といふ風もれ枝のもみぢよりものけの哉紅葉と散はて風に小判切しかる峯のも上さまへ出る慶応の賽銭此様刹を文鈔も書る白拍子京へ行くといふ宮はぬ京夢るも菊にかゝる海岸老女あるよく弦研て弄る桜の中に琵琶ほしき俗〆ても千ふ夫月なの琴狐一声し　宮折きの紅古と仏のおそぬての緒君君に氣まゝめる山深く梢かく薪幾泊の火を流して

桐窓

弥勒菊あるてしさらきりたるに見ゆし湖濱の水をと射てし

神祇　天数
君宅　吴信
景色　罗宮

山高水辺にて稲雨を洪雨をむらさきにて

闘琴嶺

なるしく来ても静かなる中の波高飯の打出山とらきさまくと奥止歯にえらる象に深く峰もの音くふけに飛ある菊の峡山峡る日本二川のおれたうきあつえま　氷象つかく想都のさくらう寺をめて寺子るハ二夜愁に芽の協を隠して去くまれとく延し　数奇魚も我ゆく深木そうこむ一葉ちる桐も葉脇のころもち書に妻氷の須广時雨ぶり一節曲のはを援あるまくなる年更に錦に始へき名賞なく

餘情ある句よ
り手柄なし

発句の斤斧つけらるゝまちの不二
西京門田に鶯の入まそしめ
様一月酒由るると寺
子息のやうく楼くきる金
揚屋の尻のんよかくさ
京嶋原ゝる踊きハらい
こんおえるに売もて出る
八旗に遊かと比丘の米炊して
気をあてしり来つけの西
丹後の鯛の湯気まで暮る
二昔字治をさをきて五月雨
大文の帰るにし一夜　捌る
列際の花に風邪まうくる
娼子ほとゝぎす子　桜の
椿えうえてこ京の山　笑み
まうほくゝさん　桜濃ちゝん

雀々房

発句ぶりかるとふ
ところ宗匠なる方
なし
神　天　霊あ
京江戸俳名　宗
掛地　名迦　京あ
楼　窓　帆
大文　仲秋　丹後
子の外　見尾の
ん品
いせ　小坂　住吉
かな　房あ　浦
教ゝ名宗の
神様　よし

及川長隠

桜咲く山へ来たを放生会
言あらく菊味まで花と荒忌
醍醐の春の年始の麦年
女々打ちし花ちり出る海
上書ハ丹後り勝吉男のよ
打ちしも小紀　清の隠くをと
名とらの宿に子年の筆　始
私家の吟鮮の海老を掴む権
加賀の若菜を代々揃との笠　跳く
故々の戻を藤孫のしくゝゝ子
五条までハ五まで此の帆に見を
まを山　松をとる任の　鴻毫
中空し唐子らついせの遠帆
鳥とし雲比酒宗山の根まゝ

人の句ハ一きはすくれ
たるてし
故一陵居の意味
まもよし遠つり
冬の梅と夜見舞
する不まる居かり
さらと其野営の
和歌を拝合する
るおもしろし
いつきもるかり
まうくあらゆく
見てし
ともく関のこゝの
あくまでかり
する鶏によせ
居るとし

旗ゆかし代ゝとも壽字か筆を
須彌の小野の白毛京まつり
縣召歟のそゝ備うゝく
宮居ん年しまろふ所り吉原
帆ハ蓮よ碧てあつまの作生高
人年しるゝ錦俤の花
李も元れおよ根り厨より
由舟うつれハ流くて京の山
地主の花揚屋の妻の錦袋
住吉へまゐる乙女せく賀
あそふハ揚貴妃と萩の湯
正月の来るを見て紹巴の句
旁よ生らく中市の人
姥桜と竹よ少しきりくゝと
今ハよ日本八郎の産声
またく此庭も宿る虚子月楼

黄雀坊

旅ねぬるすゝめへ
道をとりて鶏
もみくねと石散
鳥売地名
柴舟人名
おもしろし
此年は白を
利口よ傳ゆ
石のあとうつる
白よおもしろハ
菜たねれゝ包みつ
都しのある宿ハ

雀海・泰川

畑あらとるゝまりされて麻のみは
花る日子まうと西山のくれるなて
墓所ハ尼か庵のまことろ
稲妻よ照して黒き髪の松
語おる窓よ都の不二なし
石川の樹々は弐神か筆の跡
枝を織る門よ絵筆の色き
みゆれハなふて家の袖うつく
菊の宿えく速水の硯えこ
大寺の座禅よ葉の干上りく
秋空仏の宿るやと招きて河へて
高灯籠あふけある庵の招
かゝれの蛍よ遠くれきてうつら
またくと閑窓とおくる日枝も穴

高点あり

叢一筋と鄙のこゝろおもて
庫をきゝと遠こえの宿
鳥屋さき寝のゆうぐれしぐれ
孫をおもふ拾ひし菩提子
鞠靴の癈の見つる児
背をさまぬる談場の灯火
路邊の亂る陀羅尼よむ庄
棒の杖をゆい渇る閼伽桶
昼も小ぐらき伏見の守山
きのふ京から長明ゝ室
日々そりかへる関の寞棒
出程に笑つて帰る宛世草
宝蔵ふるき庵の佛檀
母もおもし寺のきゝ見
月に眷をむけて眠る堂も
後ぞえそしの御堂大佛

三爪菴

強弱あるへし
地名より中も
京地名点あり
人名　桂均
世話よし
母　姑
舅　姥
女房　妻
妾
似類多く

内田柳尾

旅立の家も大年の家もよろし
気むさき肉焚仕る霜見舞
甚長する宅揺れておろす出板の
鏡わし日の色見る吉原
海はの鉄牙は成る人も閑
猶いゑとを人ゝ腊み出枝
出そい内船と麻て衣を糀
孫兵の手の桜刹ふる姥
嵐ゝ分て書の家の時
糸竜あると待られてゝらうき
二つある寞ふ梅のあき酉の町
新搆つゝるも温泉場のさき掃
女を恐るゝ井寺の太
兵かの子醉ふ母連れてむさふ島

おりしくとえと
しくる作るへし
らえとまゐるは
流れしるかし
ごよし
かけ合せする句
も点あり
まつハ句をとゐき
出して作りて
点を抜へし

子宝とて飯粒をぬひ
紫陽花ハ口のふさけ笑ふ花
松ヶ岡ハ童顔の色の寺
人のあまハうそをつく情
涼暮去り帰ると内の人
そなし亀てみきぬ亀ニ実あり
家のつけハ膝元の柱ひとをく
三間の神ハ田植の昨頭髪
葬ニ男居と血にの嬉目さけ
いく夜々恋の昔湯とえみ立て
子のそる飛沿て探る涌の夜
鞠子宿ゟ欠しろのそまし汁
を義女ニあつりの様ハ贅ひしき
身の赤いおハれ破ニひけ酒ニひけ
白魚の様て湯とかるめ生佛
翁病ニ禅なり娘の夜しか太

虎一道

題弱来るとい六九
まつハ陰多し
あみ流をハおし
免角ニハひみけ
歯付盛れのる
あまゆしきる
いくつおくちね
するよる可ゆよし
附る外の色せう
詞すくるらん
をつくて作るへし
高聲なするハ点
またしは

東金羅

川と名の付く川あるし小川町
匁目ハ大通帯は凧つり
牛士ヶ牛とえおして見うしなひ
京の橋ふて来をつり釜
縁会へうまくらさして京の下
丹前の塩谷えんしよ底金
知恵ヶ立をひつくり化偶陣
あるま侍も羽織をとせ変化
いやそや元ぶ気ハつみ業
うれしる腹ゐる身ハおかる
纏とまハそりしと呼屋敷
浄ゐると四五の声を荒大丈
鰹屋の懐かりし目て居る
深川の古寿に静と余海る

時代時候公笠
よまいひゝけの
すくかゝるゝハ
るべし
又一堂の中ゟし
一誦ゟ云ふけ又ハ
ありしきゝのあき
堂ハ誹諧附物
に武目にかゝり
兵の面白すし
おもしろき兵の
仕方し

珍齋

一作中つらかるハ
女なれハあり
されとも顔白まハ
多く浮き白
まえ也る
隠居
信松
尼　正教
母　梅物
右の人傳
実家ハ隠く
仍るべし

尋てまいる尾張知せん哉
蜀の札望く運つくしたまへ
百々かつても修行し飽
舟齋に来るハのうまの卯童
松か飯にて結とハよくいせの
貸る弥を播まま上つてこけら屋根
隅川のすまま古ほ出松葉屋
青あをとあらし如来先生
幾飯田町新宿へ也く
殊に昔の遊行上人
七ツ代の寺ハ俳々ふかゝし
そしてある下駄の気散きらんせ
嵐とおそめ久松町へ早ひしき
跡からか呑む人の意丸
めくらとしてハめと揉る村
兄せの陰子へ泥かかゝる

酒井野雀

春されハ西よりかゝ東山
居續も気にかゝとかつてなる
隅田川元遠ての気すまゆ
秋風みらんつかくれつ角力中
浄伽医者七より舌かよくより
所まて隠源神く奥も枕もなす
人あまま生れし役ハ仔せまいり
秋もえや浄女か足踏の虎の経
羽舟の丸丈まんまの海風
暑姫かなるあかし神か恵
けいせいも秋空の末よ強く表
音気白邸後顔似の気前
絵も焼あハ也とこの古近辺
性光か足に付ける形の多

ゆかしさにうつると
茶蕎麦に依えし
露　蛍
名家の句
なれすまひと
てらつとせりけ
作られし
女の実情をよし
おかしかりしこの
ある句も
見あたらず

是非もなき一人旅に猪の哉
天よ田植の達る陸奥
置千光る夜の星山
山へハかゝぬ八朔の富
寺と名井のかる磯金
婚礼けりしに竜螺と讀む
まうらし良く稀の入定
光原氏もかつらきの非
小町ヶ塚雨乞しらう
元ヶ大まつかゆしろい尻
子安へよ宿を久てある母
赤穂の書の本くへ将
豐女方眠きハ人並のゝ良
向へハ香白ヶ多とまうくる
香車の守るに抜身と実山足
太郎のりう地向ふ地へ狗ふ

了雲房

強飯あるとも
三申よまつハ
鰯き方あり
おゝ　くとつゝ
句作ありて
猫の句をきに
見あり
生死よし
句気よ　気まを
かしむつし
全座旦の気体
もかしハ
あるなり

林泰道

香の師のあつまりてとりあて
目と目の鶴とかけ川よあ
惣て居る鼻とかまへて京の細
工跡の名ハ何とんと春花
筆と見れハ類ひ絶てまなし
田子あまる千鶴の君のまあひ
子鈷み浅る日あしも二三寸
かけ人さまりしと衣くまり
かわらのよしず隠しん垣根して
まふ入のしかき日と余きくて
和発ひらんのくもり秋のまて
庵疹よ紅の紙幅と秋の在
産ある枕よ縁ある女の子
婦趾よゆへる琴の假座変

麻せぬ故のうゝを忘れてねこまん
まるの肉ハまことまるゝ鯨の美
夜の旨味の出来る深川
さくらんほとつまく吉原
ひの総手よとかゝる貴
承よりすれぬ売れの秘
猫の仕立も意へ申すうせ
割出ても喰れまじ子の秘
らるゝへ近い江戸の坂な
料理をせられへとかる六月
河豚まかり成仕とふ初鰹
代まる原て金まみ　折角
まかりこふして育つ子福者
地様かりかりうまき月の縁日
子とま下川で世の米梅
送方よ見せてハ部まね献之

來笑菴

強き方かり
数るきらし
面白きうるも
あるか
おうしうと本と
しるり句作り
あるへし
言　雲のあ
とかくありと
ても
家腹の句も
あり
踏と来ふへし

高橋岱貝

大雲ハ網よりかれ奥ハ多し
癩癇のまるへらしく礼演て
是努へきま穀入るハ御ひて
小判のそんし申しと苦みする
行不足かく京除と待つ
四十七條のあとへ振気
小猿のかりきよ着のあんしらし
網蓮の四方へ思さこほしけり
接針まするを見と金女房ま
家道の労みてらねハかりしくて
小判と地のなあるる市
君かさくろとえる古道人
咩をとりまける気のとま子
松原とえてといふ人床しくて

白仇ちまく
あつとしきハ
きいめくよう
なると見白
すむ松よふし
がしちりと
へうるやある
ふあると

けいせいハらんゝ利口と思はれて
ふうりさ去肉の枝ぬ揃ひり
そつりし天井よの下帯鍋いふ
朔日ヲ知りて蝦夷もりせまりけり
未後くさまりの中にこ多人
子さんあらかれハ商ひハある
京ヲ見りあつて勢田の長橋
うき世しさよ京の礼返
傾城ヲ学の女の知りり人
仲の町まうく様くも侍
多るハ近てもし女の着身
あつりそてもないく老丈の盗人
見返りの立ちくく出てものれ仏
拾ひ不るおもう近くて悟るなし
見棚かきる母くく白粉
おくさき梵論のつよのまゝみあふ

合歓堂

頭新よりそう
あるま
一俳きかひよ
そくてとも句ヲ
なりまうくらく柏
子のみるうえし
要るまかきえ
京の句伸え
様あもふし
く情の句よ
るよ多し
も隣く
すいうり

省不言

白眼くて気乗あきまゝに老寛て
むかふ石理いふて承る命下さし
補ものヲ物ならきさもて都分晒て
来さま文めてさうと尚歯会
神軍まさ言ぬのまゝへとさして
支流りて先達言のちくきりて
門去ハ先へ桁の来るくり
人並ヲ務向く業ヲ来ゟ
遍昭も飯ヲあふかきかくなむ
ヲる山文れもいつく痛みり
旅狗も脳頭知よみ家のメヌ
庵訓ヲ使の来るくり山桜
節の梵論ハ女ヲ若是かり
狗の大の凸うのあゆる大吹作

一ゑんをめりて
かしらぬすみに
つくへつゝし
あたらしさすハ
ゆふかみし

満る夜や破軍の剣のいらひとき倫者なるあまの母の慇懃さり不性てハおもしぬ仲人所縁あしハしまを抱そゝき弟るると着へて係きさむあり室衣の灯まなくしらなまゝ怖るゝもしも名々代目のさめるかしと定めし大寺住の花の京へかさなく梢は吹も尾くそのすき禅ハきれし然坂ゝ蕉也写しきしれぬ霜の素倫うつふく色手多いもし路夜アの夏まこそ花の葉塚ましとつくんてし若をけいせハ妾の母な庵は家かなる

柳下菴

ゆかしかすなる方く京花名所一の名なくし以茶より守千かえりちる葉かし高雲寒春千（住なへし）頃寄春京と名なき都の名よし柳といふ句姫母といふ句三くなる在らし

垣紫鳳

日本のすみしえゆるえ日火入み仙姫の白め年の紀狂歌なくて巳ゝ無おさと自惚して支考はからとれもの肌やうなかろく梶て坂と焼御堂原すもおけぬは総苑女みも帷光さてそ急りなま茶なりの岩体ろく拾るみそ上みて下る申るよひ口かしさ飛つかう業なるも君眠りて雪の暁もそゑぬ大伽藍故尺のなふも柳へ来ゝそれてえハ性子も目立つ客胆借りさし出す学なる春留

母子
是も参り
三よし
信寺
庵 阿陀
梅雨も
作ふある里

こゝをよしとて寺もすまゐ宗旨
乳母か子にある愚の念仏
剃にかし是ハ宗旨をこしく
猫と共ても浅いは古い詞
巾着えり語るもらし地
西風もいたりやけハ若工をりを
まへきしぬ達よてうるし能え山
留舁ハ死の枕にみ気しして
み陀伯て由緒と語る住居
病より揚てハからる髪のかり
火わ語の務をとたかるの上
生尺てハきよろき尾灯火清壺
踏をうるさく若ハ飯程
笙吹て拵る位のつましく
気とあへとて龍信伯う
子を見るさへも旧十かり

寸歩庵

張弱ありとハヘ
もし隠き方み
とりく見あり
石なしまきあこ足
へねよ

毛獣　雛子

鳴　葉山子

佐伯何
あらしくあ足
つけるる句
ありうと云
しる不
署ぶ門あり

村松子鷹

俳偶何佐田の境とかとゆる稲こゝと存念の庵みいをぬ意女をとこてきしくて不者今わさ物念てひそむ新類か告てもしまさ雅さき東云やんとねりよ妹承も仙笠子續百の板を悦業のこみせん深くいとありま母か弁るてゝまる又みきふ義の廱の草とも巾着二人ていりぬ布のかし紙おのく耳の赤きる巾舟若ハ便と恒く語良て居さし本様の里みト聡もと

世話なり
家のなり
古代にそえつるを
つけたる句
地名のまえその
のつまとむひを
ひける句
おりしこもあり
せんハ外しの
ふまひきし

焼米とうちあるにへ物いふて
うき中へ盃出してまろうる
ある六ヶ狐の地を様へそ
雄の声かれまほひの一つより
行にすけても紋のある内
からむけハ燧ヶ岸に雉の声
旅の居亭をみ面の悟ヽあり
茶俵のあれしを乱ハあつりまうり
当称豆の陶 陸する神附あ
る薬かく栗隣が家のあハ並世よ
和探旅康に作の模くそへ
宗旅ふて琴とも深ゑぬ物思ひ
棚尺迎よる鶏の 鵜合
玉角力勝ちとすけハまろうない
あんまゐ婦しし肩のゆひ上
書へ又ひとわ落葉の梦人

南花坊

強弱あるへし
さらしと見て
外へともしく
一句まきうとり
作るへし構成
のよき句なし
生と外にはもな
かし
ともに季しする
取おり
言うり判にてんとる

鷹　揚屋

茶叟　偕

岡村石鯨

子弟者の自然と馬と画かむ
行きて出る気のつりぬお惣
古用の風と入れる讃へ之
抛えぬ挽ひとりと居の友
手家まのめハ盆つりと成る
去迄き他家の日数に梧れて
玉椊桑和に大力の偕
根引と思ひてまる尼年
名偕へうとし礼に枕え
まさ故任の新ひもときに菊咲て
蓚りのさすりと恋の門口
二三るにの子を抱く其の人
自然と孝みあはする姥より
田も我家質流のなるし

関　元日
島原　吉原
城　名所
凱陣　乾
上方の句
地名ハ名ある所
題とすべし
それよく　知りて
前なる句なし
買名ハ
作りものなり

西峽菴

強き方なり
不義
京地名
好しく京家の
よき謂を考へ
する句によきよし
あり。
会表に植物に
水辺も法ニ中り
かり句主考よ
へし
とかく句中に
勝之のある文
くるよし

源氏の奥ゆかしと起てりさの意
世草子をし　くゆる陰気の山
異の崇く脈も尽きーるを見ゑし
松明に破船の火とあつまりて
何不中り女梵論の聲淡
損しのかそい律僧の枕
子の火見せて鷹の乳りふ
大る痛にあて送らる声の底
水立守於庭の内の涙顔に佳
隣近ヤ大丈の将不翁の内
時雨の夜に鷹秋と云
たまげ舟るらくまいりくれ
画師脚の色とれらく出の上
秋風の茄と為に乞む三十九
眉の震まて　梅花ちら
産篭情るに尾の添戌

内田沾山

海坊主秋に蘆に小声して
売とかし廿紙尺て乗るおもひの
長生もあらん芋供かの叔
海賊に二艘えうハ飛ぬを
汁猪さるの君歌の役莚ヤ
にくしと枯の猿に恋これて
生涯に二度とせぬ御礼かて
臼の法か身流の姉淋ヤ
法廊こ石の鹿戸に嫁の声
篭毛のあすてつくしくあらして
全売の平家ハ乞程かなりもう
京へ出て何石の上のまあろう
出陣の勇きくいかせる古用二
来かて是ハ娩のきしきの山隠れきハ

むつゝく声え
夜中に行る身に
是のあるを
あり

或し宗吉の天狗斎家ふの
在室ハ人の後の人きひ
彫作了頭木後の俳槐
言奥さ朝の庭にかゝりの
松浦保之より落き鼓して
安田士ゑみ来て云へるを
如き羽根をきせる蝶は法の緑
狸の穴へ家うつりの御
草亭ぞ云る西施亭とらむ
云れる帽子ゟおもうけまいらせ
借るの前をひとりの太縄
扬を見つめる君が湯上り
背けハ女の方が大勝ゆ
言るを喜んで関は刈る中
夜半 笈 まゝ失つきて
後人名雀鋭雪のよし

月花坊

頭痛あるへし
防とさうしく
三分の見えを
身一とはへし
いつまでも待ろ
まふハ是かし
京坂名
低き棲菊
京　雪
客　丸
寺　民
齋　孝竹

長來室

生涯ハ私ゆ旅にて神気負へ
名のはみらきた親の妙秘薬
中の祝十万作猿の血のあと
毒らしハ中きゝ家のぬ母の墓
気丹をとくハへ懸る獅子口
春女きひしく月に欄る桟
馳走ニ疲れて帰る客偏
四元山堂にし住みあれ
巴海音気ありと牽政治
居様を与う丸もねよりろ
生ふらさ風に根森きる偕
吉原をかし桜の名を嘆て
不覚ニ山谷の菊の香ひきて
咲き六位の柳へ経列し

最も
かし堂上めき
故院あと
よし
古戦場あと
消ゆきハ
るよらし

産声あるし一字の主
様氣死あハあたし康救く
告子の痛む点擦る許る幸
火宅の跡をほとくし尽る
无言て居るも蛇の一位
蛸壷と火入子きハるの苗
牡丹り咲て不時の説法
売らけて圍の三笑
承盃の名示ひけしと振呂
赤つき切かつる方揚の肺
唐傍の半へぬ新芽より
素の君佛に作るかるし
大丈り助くる康に鉢医者
菩提花に作と見へても庭へ
庵にぬ生つくるの皮 剥
人知らぬ毋も郭に出かつく

鶯來菴

蜂飛來る人
買ふ子 乞食
既気 陽の喝
白絶をつよく
さらくし作る
へ
急角おしき
あ細えの君る
るよつ気し
驚見つけする
をさひきしよ
しく白そし

不二沾宿

八町屋表太き赤の途い陽
暖簾さしまで面白美人娩き酔
猪單般のへつきる点ちなし
生酔の刀伸あら忘りく
みしみくあ衣ふるハ子ぞ告居て
皆耳まらぬ紙ハ気のきこくし
大庵ハ見てもまの報の衣ハぬし
正直のそここそ見申るまめ狂
酒積の炭壷おこきも火吹竹
附る茶店の纏夜放りして
様まつかめおしき居る痛いして
よ猫の妻しあらハ賦り據
卿大刀の白り傍の金くれて
さくら海死あハ主をところ康て

里ハまつむら
よしと
いへてある

あいふ接する夫人まさしく
不思議や百欠辞一つなし
けいせいの能もなまなし
身もれよくるまわる明
日のくれまでも　后千人
りやうのうけく　花嫁
香は菜るつき気配うるさし
出面多く人　外吾の思
そこら局の窓の一声
互ひに祈る山伏あり
彼もけしくも帰洛あらく
捕まへんと猟夫をかたらふ
いやといへさあめ毎の燦
幸ひ法りのまて御燈
花車あらはれて又ひとつ香
る康よ之年

環堂

強将のもとにあり
ちからすける
ひと針へし
京家のよき句作
又哉　京地名
文方　古書の訓
赤穂のうらみ
古戦場　子
思ひし　母
深き　句瑞子
英句てとめ

秦佛外

菜の花訓し又松の尾の宮
ゆふの古主の城下赤くさて
内裏ゆく従者待の宿あり
庵を出るめぐき　箱間
又切隠なけて眼る　長明
桐より八田辺の塚の麦二くて
是供まで二十四盛とふまざゆく
宿かうる赤穂の塚の鶴鳴かく
麻からしき新貸の枕もまかへて
裏の也うかしきこゆるなおあかてく
露ゆき田螺子の菊扇あり
今の月まで千本か時うらてくる
山野活を佐の皇居の往清まで
朝暮のこと吉良房の沙汰

此の句ハきれい
よつゝるへし

みへと称せる歪ぬしこて貴の秋
御供くれきと大境の宮
奈良の出郷ニ母の小つくひ
いくさん皆ハ此世と去りしまゝ
ニニ葬ほせて此舟やらく
為きの勝と断つ其の厂
雑子打の行披听る法の場
衣延ニまた小辰を除木とも
母ハ蘇生とおりかねしのけ
ニ活ニ白衛まらふ衆出る
一毅多生　宮の御帰依
法味方ニ賜ひし天臣の法門まて
良桃か狗ニ遊ふは極よ
任の御加る滿る者ケ家
張永の秋とから会ふ尼
労きの将なくきいる白拍子

麹塵舎

陸弱赤る了
ム叔よし
貴多
男々
君光
都てしての句よし
歩涛き作
校同ふめり

省崑山

梅枝ハ二条后の几てつ直
く、不見足以嵩と受の孫
王ひけるあるに忍せる松の内
若衣かきニ肩痛くきる家吉子
ふつらうと基市ニ狂女の肱枕
鬼火ひつりと及ねの堆泣
小萬ニ俄きる孩ニ唐かれて
まこ総ニ娘かりる松の内
枕屏風ニ蔣やく新
咲の形其りしと衣軍の将
新しい物の形しきる説よ
信女と号する小性戒名
貴僧頭ゆ母の卉依僧
うしろへ脂とさへる此銘

自と分て互に争ふ宗旨論
するへたつて魔仏も縁なき
利も法もつゝめ亡八ヶ腰の地
西の子の信ぐ齊る宗良の主
仏もる原沙ひとつ其の主
説にあふても信のりきまり
あんすやも乞あにそしる仏万
法和睦の使者に学人と根本で
中りても去ハ孫をみるれ
其真の味宗と云るも一百里
いつゝめつちやみなりし碑銘
禅信の仏とも一に湖沙人に
各信の事一と魚様に免道て
嫌ふなりし諍の気
一座へと取けハ森に属するなり
発参そりかゝるの乞佑

徳山斎

師縮宗ると之とまきハつゝきなあり（食故）子の句斗士めきまゝる句者ちきゝるをつゝるへしおもしそ第一し奥深き句もきる句也あり其中に又荒の情古人芭蕉伸也あ去雪あり西年の老萬也

榎本牛呑

みかても殺ハあるまじ精進つり
立孫ハ寄てつけゝる秋の形
米春ゝ衣洗て中る花見年
妻娶の後を絶ふてつまを升
関語に罵ひ出しする女かる
嵩ちらしい門とゞ嘆きとしらんで
血気の葉届くる杉ケ窓
立命で林爪入るゝ沽券状
湯上りの何ぞみ取りきさ立姿
学の側へ出て来る洞に竹
瘡ハの耳にひやりと鐘の声
凱陣の一の手柄ハ命まで
振袖に出家の並ぶ諸の家
業内子の田螺入るゝ籠捨て

のかしよらきもの
なり
意の句
其の句変しく
降よき方
三句のとゝうりよき
句
其句ハ安らかなる
方
題句ハ強弱を
に点あり

二口三口乳母よ大学
膝のるゝ送る侑承
よ枠て乳の童子まくと知る
膝の掛も手枯のうち
志きりに口のかえし御意
瑞句常まる夜の嫁掃
粧ひ去りし毛兔の家待
る上ゝて讀む所乳の冬
麦むすその苦ハ同し十子
一山怖きて児の氣つまり
洗ふ深よ住てる妾さんまい
眠りし出来る陽との待剃
くらきかけて氣むかころひ
省をかきみて遠足して来る
夜鋤つくる飛石の上
鋪かね陸まれてる明

萬葉菴

よ名とハ人を茶齋
みたりまするよ
作るへしよく
味へて知るへし
附ハ勿論折琢と
吟味あるへし
人名　連歌　仕
捕者　旧場　警
博士　揚よし　變
奇わざ　妖怪　生笑
路考　聖　僧
韓女　狐　豬
夷　毘沙門　狸
左遷　妹　法師

皐月平砂

捕ものゝ飛る見せしの蔵姿
折膝て獲の血とぬくふなり
猪つきまてのそまりし舞
流産安しと博士さし上
他なくまあの連歌もしまる
筒先を驚とらして山深く
学者ハ家傳ひより居眠りて
凱陣までの白髪多く母
吉刀持の御経さく称ち上て
夕点は火腸流しき妹をなと
寒の百千陽ハ強より
時系の家するまへる侮るき
鏡とはまろうつりぬ　薫
起居ふてはかつく　羅

底従　桂女　俳佪
為成　冥零　従老
單の句　又の句
意の句ハ専句と
よく見定て俳氏
のかなむきに陷り
する句にハなるなり
なり
或ハ正風体あり
詩または口の古
調を宗とする
ものなり

雀睡菴

弥翁ある〳〵
身一隅をよく
仕立る句のうち
てを吟味して
撰ノ　俳佪　同
撰ノ　壬生猿
馬　牧の翁
尾　祢江
虚飄　説躍
撰犬　鶴見
夜蛤　網代小屋

露む麻と概らしたゝうへて
弱りきぬ灯ともりし又直しく
三升店干し信徒り出く
むし單ハ茶漬目お
竹灯に礼者挑し蓮二房
法師ちらしる新る味方
小山乾きし宗衣の墓
夏故撰分けく麻のる吉明
芦火と焚て驚ゆしひる
河の坊の夢ハらつちもあり笑
神子の坊へ立りける
美待ち点に路者拱く
時雨に余旅の所消えつり
日のいとえしき味か衣裳
厂秋の足枝出して深あ工
むりしき職海はいさ旅の中けて

皐月陸馬

露を聞見合されたと誇りなく
待るを誇の作子源ノまもとく
菊まより刈くて佛曲の名続
花より俳くりさる夜路
御俳我田文旅僧の翁さて
鬼速て紅葉持もく山深を
足を衣猫さかへこ吟しく
秋古世しまむし示の高本履
惜りに森て恐る牛と傳子来て
静しく森年に至る待る蕎麦
撰ぐよ撰る伯俳の代々
妹許中けた足の流るし
是高と出る鼓よ栗のたる
見書よ雑のかくなく年歴

柴濱　墨引
奥羽の地名
て若の句よし
當句ハ実ニ情
述て景色の句ニ
点あるよ
本牧　神奈川
此らの地名よし
雛飛作
瀬崎　瀬
手本を譲
名を讓
如く書之

世諺観

絡き方句作る
三句まで了る作之一し
中一作をまとこと
を了
頼句ころよし
老巣点の句稿
當時ハ東宮点の
手絲すあり
蘐園　毛物
掃之尸　近刹　晴天
攤寺寺　偕
尾　師房　児
丸して新の句
軍作　藤名　凱陣

桑中ある木登りて櫻折り
飛ケて災小児あやまち
夕良の花咲きけるし油賣
尚歩常丁も手を洞ある
買の秋色の吹く花を折くへ了
二人連てよ座瓶さけしき
辻角ゆ行白古宅の得まく
さりしさハ桜の花合さる山櫻
鬼さんをまれハ櫻る星ありり
孤林浴ハ高くと甲州る落られ
退立つ附為ありむくるの上
又為る除とめらるく悦伯厢
櫻鶴る縁ゆるりと九折
婦る変にみそらり旅篭屋
娘サんぬはハありくと候の書
夫究の[illegible]ハ絶奴鳥り題

桑罡了我

偕一人つくく秋の水を趣へて
不ミて学出を書為山の連
買書の寿るよるえ分まる
本のけ落てたえいろて済る
こもこく満る訓示ゟ出世金
田舟をとめミめふ落君
元まふを屁ふ笑ハて壬生の猿
牝造の眠る君の方き大一座
えつきしと藤物とおりと害の申
おるの公く貴倣りすき
一足の翁参ひ参ふ香る
五山の彼られ古雲竜　明
清ふまと尺ふ出る蕤の香物
害の藤物を門へえつさり

青虎 秋旨 蛇
罪なき虫一ツありて
あるとむらひてよ
柄あり
篝火 恩光
琵琶 角力の嘘
能の子ゆて詩文を
置きとうけ合也
あらし祇信なら
とハお返をへし
おもしろき仕ちき
ならなり

五十堂

此別の大意なるを見て
となく八四時節會
合集の獨吟十二
家他の發句の意
照の册をまとこ乃
物し季句の附の
意に句の通り
お句の見たし
都て一巻の書
をよく考て
其庵

横川へ状の届く晴天
弱鯖よおつてまる八小町
酒買ふ寄る洞の塔の為也
傾城のうそも一度ハ角にき
今生じまでも仍を存ぬ矢脊
和睦うをむと自慢ある嘘
洞の塔の玉眼をこき物の合
脈古ひらうり瀬りし紙單
あつうひつそしまの割張
あまつけお杉をおあるちしと残
売おしもかんざしきうと
さろよく居もひつて凱陣
對の衣の對よ丸ねあり
桜うけ死るハ玄してとこ乃森て
井さまの出と玄しと秋の香
御事の物よへ[illegible]ハ凡

小菅宝馬

長命の血筋もうしき大女
給も焼合せんの御達にお
唐形の命そうける惡つあて
焼ハまさ器の二階を怖うて
家のるわくやよかくきをて
る麻はと佛が一日数かけて
兵出をと方のわ表のあまれて
紙操み藤よ不二尺て桜んて
清様の所ひ会する中の町
子数詔ありと売るえまうれ
色れのよい続の帰る小六月
揃川の産婦よあるわまり縄
神單を衣古例の大車柚
佛さへいわへいんさもしゃうり

此扇ハ相草かと云艶を出し
姥を女形のつかさしめとは
此郎位の日か世しの元日
大生鉢ハ丈へぬ吉原
泥の中にも蓮の童盛
たをけか女房貞女なりけり
くハぬ限りを出女か傍をして
ひふも浮瀬へ氣るる空海
妾の元年薮夫押して
寺と女ろしまいかある京
よしも生きる武内應
縺と娘をよのまゝて苗ちる
浪のうけ流恐の賊
紀念うけての娘の長生
又詠むつるなる實を謝る母
田舎大工午忌際か伊予守

一陽井　谷素外

落瓢忙とは予
なく附と五悠
は家を云し
白仲葛くあれ
とは年々下の
おりむきし
一夜言ふ是に
うつる流ある
白ハまいさて点は
なりしん
詞かえしかに
言とえあてある
らしきなよし

此代の旅一里下つゝ、其を挹
天窓うつ風川きりて竜まくら
釣得も下客ハ寄せる綴くこて
彦樣して又ふ神と那戸云ふ也
吉原の人ふ生されて來か詩り
脇しさの杉は夜汲みか祝ふこと
一月寺仏に奉さん乞うり
去りしみくゝぬるの深草原の尖
居風呂の諷も居ぬのみよし塩て
盃宮見ハ乃ゑと咄る果敢人
八人藝扇風係をて遠出し
此とき國まく御み除ころびて
宋諒が風は空迄て角を氣柳く
有のこ葛し山家の冬の梅

多武峯の
かりむき
縁紙條案と
たしかるへし

な大工繪の模ちを畫るくも
兎るハ牡丹まのられ役人
気ゝ自慢の表かの經談
模様そよい京よしくの木戸
振る評判の役者と當ふ
紙も太のしもきうらしう
此梅るふと饒くらしい様
目なりうしてかりうる居る
人まつゐうる家の浄瑠璃
義布ゐめく實ひ盃の盃臺
母よりくと女人堂より
ゟりと赤子の宮と學わる
咲く櫻ゑ大門と斉つ
賣居の戸ヱ家内安全
夜の梅櫻ゑ積へと見る
日待日かはて背女ゑ祝さき

妍齋

強弱あるへし
何ヒりに定まる
遠方もえうを
降うすりと崎み
京と得へし
雷鳴の句文
惶くしも意味
詠きなまろ与
まし
意雲寄の句
數と移て
まくへし

島津富

灯火とうとくともへかきたて
枝の色さく見ると神書のやうしある
新造まえ立られての枕し
旅ハ鳥海の志しき山の上
小千坪桐なるま秋なとつくし
九條かう見れハ勝負けハ衣
手段お淡良皆とえくせう
快ま貝扇の風ぇ動して
ゐくさの織漁を夜ま起されて
雑家畜家をとうとゐうより詞
胴あけの雨末へかりて田舎哭
詠へ集て枕をさかし旅つかれ
立居うまうろと見せて思ふ人
端をぬけハ目なまり琴の丈

一体かりしこと
ちりるまもし
世族のみれより
きるとすなる

金巨難をくゞぬ家母が孫をしら
森佃子孫とそうる女房
後生の祢を手科が流える
仲人まうそとし厳の坊様の
御入りの手伝りて来る姥
翁白子等小作了かえめし
初午の悔の遠くの鯉場
功名の名とけ　桜この灸
中りよとまかでうきてあくむ
尼ひあうと耳ハまさ森さ
る麻とかしゆハ巻刃皇る下女
伏見の翁の厠　あと合の
様来てよい条よりくの下戸
母も一口　吴山の酒
二重のおりし　大仏の腿
足那まてもいさむ勝るり

生白庵

御弱来る～し
神祇
天数
いろ〳〵辺　誹作
桂ろ
姥とゐよし
地名ハ佳みと
京々とあて
作る～し
上方地名上国
異名をつけてよし

常木丹

道ある穴へ沖田の泥をねて
咽川穴男廟も通ふ廊の先ん
浅きハ手く数案の火灯するせぬき
油出　妹の羽ゐのうこくのこ
閑伽の井へゆくかと尻の露こう
陀ろとめて池をみ老の麦杭て
さら咲木の下けよさら中
社の畑のへりくお前て
口惜く射きるまとひつお世ん
恵歩くとぬくと信濃の田柱笠
片っ八まきとりし鬼尾
八条の中のメ　ある笨ひとつ
道坂の関のみとりを於返
石工の箱ゐく日和君家了

ことふへとえるなら
に作意よし
さらしくしと読らる
うその句きゆるに
句作なりよし
寸松点の中り
なる所よかし
あり

幽雲斎

一作るをかし
よくこの句のこと
見と身とを当に
味線を妙へ
かんするる句ハ
手搦りつてをかし
此ゆるりのと
いふ句作よし
句ことをへらる
作えし
中ように経句に

笑ひと杯に依る勝りし
帰る諸いぞけいせいへと到る
今年ハ母になりし名返
宮に長柄の月之吉原
調合おすい物屋まで医者
梓にまつりひらくさられ女
物度り音来て片付る様
世なる親らその花かりき娃
てきめんていこ名ハ親こまて
別除て見れハ菜ある俗
極彩色や富にけいせい
小池の水通り行おの盃
秋ゆけの隅に心る新造
門のまゝに右場と申し
一つしるる單師なりけり
雅ひみあるへりしる見つけ

笠家左簾

志ろ女か形の月之山崎
出るの中みえる居るらつき
弦子おてよとめくる交尾
買人あれえて洗戸の際版
まくへ放逐しのあつけもの
の勝の名とつりく花以坊
焼香の厩よ不信の並居る
小豆粒へと饒しるきゆき
元のよい蜂し琴ふ渡る兄
大石家しむ瀬田の手綱
猿人の地つひろう火をともして
塗つる孝女の之居きらひおり
ムまて涼しき月の川社
馬みまく壁中の日の息かり

まつりくとしる
附にたる鳥あり
其の句に依ゑ
方ありてくと
ゐと申へし

猫石へ毎日毎の礼にゆかて
人ゐるうちの若い衆原
川灯に吟を述る坂を見あり
語て五平ー譲る道を乞せ
唱まちく　君か高北
後あき里居の里に家の声
女とらに赤子の巻と抑つけ
出るもとらすと諭を扣る
凌音の遠にうかるに八すゝ
夜まと尾取るる花原
出ち侍に近身か人同に立て
大房にひれかと神事の纏
仏名に隣る諷ひし画
宿陸に糸くに真一のし付
旅篭石の様多の老耳ゝをし
頼あるうらに見きまねく

珍重菴

強弱あるへし
趣ありよし
京地名　東弁ぶ
医者といふ句
冬ゝによし
大数　是光
子
るの上ひきは
置うるのして
ゐとことゆるに
まうしくへし
堂々ものるハ
一ゐきぬいて

大塚雪斎

著蘭と続のかにハ点ゐるし
柳に二十かる昇の傘
揺しけ差原の陰に吸るあり
一寸あるうゐしの之平の尾
沛拔入医の一つおとしける
是綾の詩に法ると深くして
通節出る肉菜研に修めて
宝梅に来さとおもんハこそきるひ
立菊の名を菜とおもふに
大八金の中へ孫仲の香かりと
世中に住きさと毎のいひかう
丈ぬして多るの雑煮受るし
論のさそる様の名雛も
んにかきんと十かまて寺

何ふあつかしく
覚れるへし
其人へかちてハ
点者のかしらを
うしき作句
其題ニあれハ
望ありへし
深く掛合も
よる所なれ又
あり
おしえも
あるへし

光のさらぬ露何ゝ帽の尖
まりおちる光のあらく硯箱
之場ろ萩衛府のよい茶碗
ぬきまれハとこの松のめて
そろらて襖をとる待女扇
以ふの家の一の作色ハ新時雨
産所へ来と錦うるしとてかくろ
投扇とさうよ錦仕のあやかれて
吉原八景も揃ゐ語なくして
り灯ニ礼年をてし　蓮二房
内の宗ろある未在所の子か夢
掛ハ楽ニ蕉葉上下一と讀比舞
作者ニうれ者ハ御の棹
今ハさくらる義をうとも高旅
跡明天送る生霊の中
舗みすねけハありて来る蓬莱

月夕菴

翫き方なるを
て前の句よし
点の句思案しも
作ふ中ころうる
仕えへし
よきお句の中をも
古ひするなれ
田舎作の句も
よかしあるを
あつ見もゆる所
守一なり

多遅糯雲

画道ハ残山水ニ始まるし
茗ニ積めハ紙まへあそとかきのい
因雨へと陰ゆへ中しぬ身扱ひ
生きみニ姿も代との眉の愛
風古池作りの一生ぞと旅
紫の米資して能ハ又ニ来る
貴てしうつしぬ母の居所
山中ニ道居とえへて墨洗ひ
文帯もれまきろの裁合せ
蜀作去此山水の墨が来る
武蔵と旅へてゐる見しの出る
庵を通つろゝ余る内佛
海山も地図もうつして四方庵
流人の赤も村の人家

ゆかしく　寂しく
上手に
作るへきり

及かき事も行春に目のこえて
西の者僚を山と見なすを
日本になつむ杜家の筆法
佛語ると天竺の文
周の筆の紙に蒼艶く
表庭前の女中　狂言
短冊嬉しく気のまつらひ
硯かかしく　幽く竜物
蕃須通して　硯の変易
猫陽灯みうかして涼し池の中
首揃まつ仏の声しと宮明りて
雪堂てみても神鳴る沖の嶋
精ては香薫を法て山祀里
霧客しいつしさまの庵了沙汰
裏筒か其子ハ夢のいのちたひ
ゝの庭ゝの良夜とうし

兌堂

縁羽あるといへ
ともすりうる
言多し
据ふ志まやうに
句を作るへし
あつしとある
身なる所よし
君老し　女房
母　子
妻　舅
嫁　姑
言の句要あり
京案内あり

牧冬暎

蛙吹菊をちり限の息
猖近く来ありせをかけ出
名ふえるしよついきとつく
望ハ一家のおふせさりし
塩漬も筍目見ては物かりを
京氏の病人ていふかり憶ふ
塩辛き目にあふ妾か小猪を
舟ハきしひといふも恥かし
りのゝ象階を六月の牆
医者の呼の法をするもあり
仏檀の戸に気分か戒名
見ん死せぬのもさくひのたゆ
まふ子あふ付とうつを離さ
奴柱に一日むせる多氣仏

砂ら嵯もよし
米白のてある
冬まよし
世統すねそう
ぬ中よ仕立へし

は京の坊主一人ハ風中かぬき
りんきんるい八仲居のけりあかり
世中の声ハ所へ夜の雨
老らくの秋をさまる幸かく
ゆらうと盃ほしの月あけすて
こんて座敷あむつくし合ひ
割帳と答ふ皆女ひとり祇園
火の上ふは涼しき蓮の房
場子の下衣て掃く夜日
傍しぬえうり舟の生醉
根を押てゆく払ひ向むく
附れて来てハ神も悦ふ
備の頃の身しのし條
葉花よ大根の花のあとこへし
音と流て来る橋の去中
ぶさ脚の差し板の間

老瓜坊

強弱あるへし
手嗅ふの言葉
あきらあり
何それも足甘
ある句よし
句をこま中すみ
あつしくかろく
仕立へし
当世ほさみを
きこしそとこ
こよ古体
京地为
うけてよし

浅井々

京扇芳の名とひつさるる今夜
宮桜浦室の児の割狭
神の灯て升ますもまそ袋
浦ぶの厨して土手よのあと
売様の娘のぬける錦店
蛇の目と勝く京の表中し
祇山霜中し宿越ひしける
眼と病むしんよ逢し木下川
まつら喝し中よ海万里の福揃ふ
湖本寒大坪流よ勝とよく
傳くるとおよ當る本本町
打くし耳とつまむ貝焼
あるよるをと中居うけらむ
母の言ハ橋出るもの包

江戸地名
神祇 天教
母 子
舞 妓
妾 中居
けふのをそへて
よ白作ある事
ねるやうるハ
あし

旬樹菴

陸奥ある事
おしこよし
宗悦のまいる
夕まつりする上
兄也
順ら日にねかね
中くへ行る事
云 賞文
外を出まへ手
兄手るる不
よし
利不知る不
戸一と兄也

西人も腮みえさんて他にも
盆湯ハ赤き古近江の味知らん
人も丘越もなりしようる京
気が移るさうに中入可る草の精
大臓不敬伸狗の様京
京剣務貢抱きしく入る
焼き〻まいりて中居升気
胡座の中へ赤子ほ入る
骨陽とのむ女房と座しよりう
島原ハ足入口うまちの事て
小の毛のほり好祇を云
師範とする足跡もく料理人
京男子蝶ハ尺うけぬ小松川
しる家の人めて中せまくる京
江戸の人兄れハ勤までまるし
洲しい腮にきりるけいさい

牧五陵

茶つくよんへ大夫りみてさるす
手とりて屏風さいるきき音
人の橋のうろもあらそし
青れも出の滝とよしの山
つらいるて津ま辛の深ンへうし
かくされよすいま地黄とくろてあり
宗匠の巨陛に抱合てはる
柚子のてふて兄すき好銘
天鵞絨の業る押借の大文躍
谷研さ不たまて気色糸て
一切舞よ引しるれと機色
云試りえてのもしく冬手し 揚
絶まくとせる 百薬の施主
めりせとへを抄る椛むすのあつま

るの香名丈せの中にほかゝし
俤くしくへにハ尺せる庵居も
扉先に機具仕かけて西の岩
千鍋の中といふうする竹笔
所けハよいれ取る冷しる
書素の遊ひに作気あされ
盃に桜こを急て飲ゝあり
川沙の白ひ流しく路峰
銚貴みえ百性の舟得ひ
笠翁の豆にうけぬ曲足角
みしら布子法数へ貸さ
元もんとさしひれくもの
生碎に返るそくりの仏縁
陸奈の夷の眼血をゝまて
雷のときれしく用と見るゝ
背中盆へうしん舟の返尚

涉無庵

せりうゝる方く
随合こ句の旨さ
そと咲ふ吟味
をへしこらひ
惜き句つくろ
たゆたふよく
附の叶ひるハ
高点みあるし
一芭の雪作ハ
七部集るし

高太初

又素るそとちさゝるぬく　ニ
余拂へ茶碗るうの足ひさし
落出すれて男精不自由　ニ
彫物の朕に掛すゆ胡瓜　ニ
糸の雪のにハゝ白菊　ニ
迷子をよ思まなくからするり
氏をとかくして公界十年　ー
口占をひきく相をおろゝあ
おもけう局ふけに修しう　ー
りゝと扉風比翼の姿形
咒つけらるし糸ゆん抱　ニ
下覧ゝ降て流しかきし里
枕つけも依て五月の夕付　ニ
つゝされありて挑ゝしつる

又合句あり
去とてのやく
ぞするへし
月とひわれ結の
句がたそろひ
をへらし作と
沙汰まうつくる
かしあふい害て
あるよあり

ゆつくりとしても小まへの番あき 、
医者の むさくめし鞠が先生
一み多めれて上見のかわきたる 一
うるむつましくこころ会恩お
蓋して夜の氷の玉の盃 二
上﨟達も佛服見と侍
剃落して老も此の姿哉 二
毎日せめる 鉾鎗の金
母の名をかつて呼し血の体 一
なみしきあらし 勢うて家
また知らぬ眼鏡自性の入て口 、
是はほり出し茶の俗薬
永日を隠居はしおしまつき 、
眉かくさりとめてとくくるて
お手まて見服おうを茶るさ 一

無由庵

ゆうらかなる事も
附合三句の
趣しすつ一ずり
がしおうしその
新一意の趣
趣るよより
あきらしき
趣向ありて
を趣あるべし

泉虎溪

夜戸もあけてゐしの清兵衛 二
元あて内に居ぬ宴の番医者
よし河をこえば雛供へ千之里 二
都の道を引し芝居評判
待くし鎖主答意を承候 二
箸持添鎹に爪出る事
麻兎はるを遊ぶ鞠曲 二
京屋には彩に並ぶ大寿司
茶菖を之茶巴菓の名家門 二
代ては蘇て信ろうすかり
町中に家見て人々二三人 二
道者自慢を出す虫白
軍帥ちぬるエ夫八大ろうし 二
女房達の豹のなつくき

柳葉をむしつて済る笠の内　二
子ハおかまの女子よ独りを
咲の孫をと文吟ふとは　二
きるくとさし彼岸の花系
出て仏討浮世てと墓の子　二
つくらふつくせるいまうとの様
雨御ては枝折抱似合ふよ　二
手招きか法よ流しり持流川
そよくと出て猫よるる川越　二
作らねと男と見へぬ女形
無代記かと弁当の面え　一
御車近く御座添つる
まるとまるるて雷の膳　二
鈴蘭の屋根まであと手並へ
枝よよる萱の曲をあまし　一
母は楽仲の花見は娘

匏瓜菴

ありのうちなる方之
さとし筋ハありて
くるの作らく句え
の底論まず中
点あるとこそら
附合いとの句のとと
見能ふら味
あらしとく
見後し寄紀
賞一こし
むつらしき所を
ありまさりまたは

紀百瀧

躬木のかつらかハ希てう　二
膳まの狗も宮いぬ夕涼
そろくよ上よろ下よるの衣　二
あんまおちんこみらう万石
文月の詠を硯の家なうけ　二
にふハ女めの琴つまみ揃
彼ろ葉も雪しまぬ帥む織し　二
あ私よる瘡よまつしるの雲
凡きる小袖あれきあき交て　二
梅の下よ仕くら庭之廊
對子主なき時代しと蔵本の籠　二
世体し並く手し幸もあ林掃
春の娘自焼て覧むいね取さ　一
結系と屏まとをりまれまの

かえきふかまく
るよふあり
おしおりきな
あり
情ふ落さる
白ハあまり殊ま
きと見えさり

大役ふ後 供まの張肪 二
済返り敵子の声をも出かね下し
船主の意地かち呼ぶ碇の綱 二
狗の目覚るも家の為狂也
芦の穂う稲も主ある鳥か労 二
伏勢ハ屁のひりきまてこらへ兼て
頭を取いて猿のとられ男 二
出男う来のる家の乞食
あんまを夏とは見せる仲人 ・
風儀ふ手よふあんて涼舟
立習ふ子ふ例して朴李 一
猩々の杉戸赤くうす日影
花の雲ハかくれ家てるの 二
麦飯の膳ふ鍋まで馳走し
家よかくし杖 竹の杖 二
鳥をとせぬ猫の火燵とられて

尾雪菴

めうらかなる方と
とかく此趣の
ゆつしい流れとし
こゝろの色すりと
吟味うつよし
おもしの外
誠ふあり
流布高点の
秀哲まりて
あるべし

太平仙夢

跡口まかもんの荒波 二
落書ハ朝いふ文と引裂く
酌か是否ハ古家の夢まて 二
連ふ寄りと敵陣の夜
によくくと凧又日和に押出し 二
幕張詰めて社家の幟掃
朧の月よき野の不弱来 二
宿下の〆と娃小麻られて
仕来例の洗手ふ〆く幣使 二
休みる眠る小蝶の馬
野桜よ奥の行者の暮らき 二
眼鏡かりく意の絶留
休こて大丈夫ちの恋也し 二
なまつしきましとかくし取亀

今ハ[illegible]限の[illegible]れ[illegible]　一
おのつから見へさみの[illegible]
舟出の[illegible]ぬ袖に神酒上て　二
夫ま[illegible]を[illegible]る
月[illegible]の[illegible]玄[illegible]　二
ちや限[illegible]の乱きこゆる
澄しる[illegible]へと忘れて[illegible]　二
内義の[illegible]あさ[illegible]る
青[illegible]の山路[illegible]麻[illegible]　二
[illegible]ぬく[illegible]る
餅も仕[illegible]の通する　二
任[illegible]の装束[illegible]月[illegible]
掃[illegible]の底光　二
あれし[illegible]菜をうこ十[illegible]
口[illegible]錦のか[illegible]　二
てんくね[illegible]

甸富庵

ゆかしかるらし
物語の現
松[illegible]をかし
[illegible]川[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]文八

東燕志

掃よせて松一[illegible]の[illegible]の[illegible]見[illegible]衣をつくく京をみて任をとちくる[illegible]通[illegible]の[illegible]唱ける不二川の[illegible]目を[illegible]被てみへぬ[illegible]日お味方ハや[illegible]眉の[illegible]袖に香をとめる[illegible]昔[illegible]の[illegible]て[illegible]き[illegible]化の[illegible]ハ車[illegible]ぬ牛[illegible]忘井と[illegible]の[illegible]る[illegible]の[illegible]てをしける

御江戸御のくの
そへての地名を
詞にかし縁と
かけて素龍に
似りうし

伊勢　寿民

摂津地名
本草論
　　みそ川ぬれ沢へ

日光　甲府

そらの地又平
うそのかみ世るよ
似し月は見る
　　かし次

勝見　金沢

杉田かゞ川
ときよし

自然菴

聯きうなかま
文数　地名
名はまへてすし

山居
　閑情ある所
あそつける
似よし
潜ま一し

まかうしの七里を渡るにかゝれて
汐みちぬ海に山路の目を休め
糸かうと宮の御よ松の針
冨士のけふり堤中り火の外
帆のみゆる沖まの方ゟ地侍し
うらに枝杉に参の秋春ゝて
東のな枝手し三月の高
解正月の宮手し車花
上下の船てきて伊セの海
車油の中に小町みこし
花童古蔵路の松の下にけよ
促てりんその昔のうち
高形ほとる衣の白萩
あるみの踊　しりあまりてし
山里もせめて女にまへて
残さく闕　はかしるに流路

東阿澤

高陽代々とも駿あしの信
一文ほし夢るうちに見へ
明てまき畑の間の宿晴き
此盾の時名の層に星ほて
山遠く猿のあつまる権寛
不稲子に返詞をしする物やひ
居ちゃんらきぬ雨の小言跳
霧みきまりみひそおろを笈
薪修の教をとこそ枝出まで
境の色する侭盾の葉子
ありして云ハきぬ意に病かりけ
遊八日てもつうしくと秋の蚊
新蕎麦の多保古流後の帰しき
牡丹一ぶん平服の鏡青

京の山寺茶屋を娘ひとり居て
蕎麦持のきまりうつき寺
次第よ紙くとろてきる音
硯ハまて居るおもしろい中
うそついてゐる麻起のころハ病
陵守ハ歌よまぬ人
落首立てしる陣のくつろき
あらしてみれハ蚕よるゝ見しん
喰摘よ老女の立居参籠し
麦飯ハ丈夫の中ち諸合て
後京の寺詳字手くかきて
宇遠のひさと居るのもと訪し
抛ちのうちよ瓢ハ身よまつて
石アへハ国桂の笠の皆うこき
云ほとうきぬ泊宿の彫うけ
洪家ろろくし渡るものつけ

如葉齋

まくらする方し
住詞をかりるな
白えまつかくと
かくこするるえ生
探　咽り
碓の萩
峯車　寮
秋のは
秋情むすし
京地名
国くの地名
ちしことおくとて

東萬英

傘の下よ禿の子うけもの
かけまわる子よ申上る枝垂
大工も京せて新般と懐く
牙婆見送る礼式大名
うし茶屋の日とそつくよ傘干て
母の読へとわらふ藪入
休京田メしく師とせ医者
頃添の香うるも似する立涼
御陽ゟ復てせまい石垣
まうもそうらく女房の留守
きと畠干ひける路外
撰組の庭へえみきせる虫
宿近く中居とそひさんよあふ
葉うて八地まるゟ門よ略立て

つける所より
哭久なきひらん
あまりぬるゝは
外のまゝりあそ
するも作らあり
又ふのりと郭
中よりあいもち
ふ換かし
世俗らの八坂ふ
とうきふ
まろくて

炭竈の上に天井のきりくゝを
結の落とむして涼しき簾の秋
出りにかに一た於僞佃
繕竈かゝりて涼しきた値の秋
鴨の毛の羽織の袖に料理屑
夕昏まして　蛟やり　綿賣
庵卑にむかふ大丈のむそひ髪
中庭の菊に橘色の秋えへて
業協むとまかく寮の傘干て
全部に庵然光る陽の寮
縮機へまと玄簾祭の焚あこう
叢苔蓑石屋ヶ門に脊負出し
満飾へよぬくひ掛る年　男
祝ヶ以て名八扇り嘉屑借簾壺
挑灯て佰の烟たる大　毎日
庵門の桜みくゝる羽行け

素仙堂

強弱さまさ
あるへし
実情　感情
景気　源氏
たき女の名
徒然かく
まか何ゑ
ふらん
附合博
第一なり

山口大路

伊勢か家の跡に盛りし　筆津虫
谷川に閑ありをて一人あ
手なす麦浦の中に一人旅
営ると沙さて隠者の妻ともり
後然に営とて夢を憫の内
祥学に従うなるも昏逃き
禍祭留まる八冷い陽吟ふて
子わ報の以て織し　よき婦
亮とふくませて逸る　蔭塚
顔吟の破戒と當の能知りけ
稀勢至八そや坐まる穢の声
精麻を縄の力にかこまれて
谷一りとふ世する　圓　境ん
柿の蔭咲も遠く忌の比

る灯籠ろても照し涼ゐの燈
そ齋奏くつと山寺の不化
ひとつ立の花に抓ろる黄火縄
あたゝく標の枝に蛙の売
出生の笑ふすには呂用あり
手向ゆるし野田のくり舟
下闇に望の薮ろのこやき星
故によき列きし作埴さ陸士
咲くも歌るのも栗ハこゝ雨
家壹子ろろけるり枝を傍ひて
田植の仮をそこふ臘月
埴る尺に葉とこぞろる交椰
牛も尖傍るを唐之吟
省するもぞの符楽の一つゝ之
もの旅設に気のつぬ傍
うろまして居る以ろくらし　ち樽

東明舎

隠務来るへし
行きてもと夕と
といふるかし
るたの句ハ
主尭くき
寄るへし
折之句のきり
句編より
悪しゝて一包の
その花交比に
仕合へし

笠原社来

神へとかけて百里よもなゝと
海暮陀へと追めアにあかを凡
近化の始末ぬる方るし
菜子の冥加にかなふを拾て
まさまとぞりかゐさる二束麦
行ぬくらして呼る梵論を
うれぬ名るき四季の兄弟
辛労の招弦うる西ねの月
縮ハこゝひて拗口へらし
木ろうて根も氣广此神
夜参内まるし　百筆の杖
見知ある狸ハ麦根の古傍宇
日枝の栽培まみさゝめる
冬も文字の放ちて埒　樗

鉢むかろは身ならぬ大佛
諒云の泣ひつゝりと救のたゝき
ふさて白き閨の灯火
丈ぬしてゐおの雑煮参るゝ
旭えて亮る旗ゑの跡
称鶯の声まで書き書芳池
さざれの外はけいせいの縁
ふるゝに蒲団ゆる元とは
良顔まこく凱陣の曉へ
帰り雪も棒もうすき唇
妹許かく骨の口刻して
美穂てまきると気ふみ陀仏は
おつきり老へ画流えて居
吟い百里と僧の出てれ
八代集とはのすの花
飛くの花なけて立續きぬ

時鳥菴

中々かなるかし
ゆふ白と香しく
行るへし
さのこ及色もる
らくゆし
女の實情を
感ぜよ候よし
不高かるかろし
てたるよし

老　尼

軍よ女の情
とぞかるよし

滿壽女

利休をメチ曠ゐ口切
左近の君と東口の條
連歌ひそしまの香味ぞ
寛躍し對みくさあるに琵琶湖で
外のさまと遊頓の跡は懺悔して
此不如りの尼子一さしちまうり
きよひよんぞ出へむけるわ灯
來の世々みぞきあげる一月寺
くうす揚屋へ足ら舟か毎
氣か仲居ゟ酒のうけ引
日をふへする尼のすさまる
枕詞の風まうくし陣の為ちる
歌に似ぬ鬼と云る尾小生ぶ
宗一把苦よさせる老が九折

貞安まのおハ生
に作る文宝用
ゐり
実情ハ其銘く
しるよ
と有るへし
うつのかきる
ふるし

当年の小枝に凡中ありける児
此楽さまに依大八が腕つよし
燧焔古風の要まる片そむし
本奥も和く文輝が菴
遠うき投る居つけの系
己つらなりてあるよしの京人
應に伝る東山夜
旅館へも主の足高うもあり
文こそはた果しるの陰
まま春の恨こそまいりて夜の京おて
伴ふ人目もかまし陵
人目も忡なかまし
偏るて帰るかり桃
て刈て雀の懐る排稿
字戯ハ鳥羽の火ゐる笑葉て

正月菴

一作せりうかる
方なり
京地名よし
噂るまかあまく
作るといへるも
目もるときうや
さし足へし
恩るを
云哉
名取
あらしての取
者あり

野本李來尓

春のすい扇をきる京度里
をみとちよ排稿くてらせて
御札の折り乏くうよ京近し
るはへもの居る伏保昭竜田昭
つい唄りとよりえつと嫁
法堂の井よ午尚了の也きを
路るの札有る新よ當陰て
此ハ一人て付砂をまん書
八講の人々比良の去天へて
発をて謝と帰さし中の店
幽代高居代るえよ星由れて
短上ハ謝と得て今年竹
仙人よ好きて来る帰る哉
万象の袖となるへいこの名蓋

ちら白ハてらあらし
背と今のるみうやちる不
雅笠　又よし

昨非菴

強き方なり
こゝのこゝろは
あとを見へし
自他をよく
分つへし
長短あり
ちえあり千
処を游へし

代ろ〳〵のせうしく取付けりつけて
元日のあさハちらの人ええう
一ふんてまかりと来りと九日中
いつのくと以後の兄弟取りて
八起目ハ始まらんと女房まで
返りきさかなと主出し隈子升
まされ抱えり芹よの連翹
ちの日吉の猿の食鍋
母の仕立とり枝ていとく
一所よ祈りをかえる所
新造日土着のあさしめ
京て廣寄て記りて張良
本枯らして哭の数に障
日本笑そ化かし吉原と出る
男らハ其の矢背入り箏
後太刀よりて世帯ハ納まりのに

溪山峯車

ちまろ笑ひ唯るてるし
とち〳〵ちぢ似ぬ点の中子
柄大く〳〵手附け五両
縄約烟の湊をさのきつく
哭ぬけて贅話来と女つま
困果かゝめて飛去るよる贅女
朧のつゞえる院舟の飯
に説おとも〳〵川笛うかし
旅通りは暮よ墨ハ門するる
箏くる足望ハ短き来ていかし
いうるかきあをて自刹の旅をうけ
まで浄泊の絡仕うひしき
餓ゑ限の気をとくみまれ
二見の瞭くよ禅を要しふ

日々夜々娘妬の目さし彩るし
豊久ハ平家普代のさまけもの
屋敷替川うきぬ桜咲くに至
猫一つかふ事ぬよ文をつうしき
俳いもりのなふも牡丹すち
唐司八斬　錦葵と　猫
中啓は咲く傘と僻らくまハし
梓はさんち兆將のまとろしあり
支離も傍代を出る昇帳
食ハ田楼の踊なし出る
郷あるくに帰りけり作男
の人つけよ名菜の若ある舞しな
とりして下戸とハ兄へぬ女蕊
志ひきさへある百姓の嫉
基欺よ挑灯発てあきなり
虫のとつよ昌兮ハるし江淀代衣

竹葉城

一作らつまらぬし
息乞　母
子　舜
姥　寿
尼　孝行
参詣　寺
京地名
京とハ云句
吉原　免
傾城　新造
此弥わして京
江戸よかましれ
よし
身八行なひまて

志村露十

かつを仙引けハ命るの文々めて
略の毛の名とこつるに寄つて
書と書く毛の誌をも迚さまて
多織さん基にハ数と物かれて
食つると狂わよきさく祝ひて
万里の砂まで麻実の和光出て
立る男の軍也も島よわれて
傘もあつて女の名ゆかり
おとくに霓と麻やる宝かな
狂言まで入って小坪のかつも事
出于よ其の舞しを全の妻
傍のせて寝よ伽しる猿田の舟
来よし男ぶりの食し身
法名の人それハ故をせまくるし

古あり
長句ハてにをはの
向をかへる事に
仕立べし

閨の夜の明りに咲まさる也
曲らぬせぬに明しきさの秋
掛られるかと吉野の仮名
座敷の床をま離れさる明く
法の餘情に違ふかさるを
全体見てて姉として峰に
移ふまいと袖詠て居て古く
底しくなきうしにあい灯火
衰の棚平しめて割る兒
構に並れハ画の画すゞろ
桃の方のかゝる長棚
柱打よつこどみとろう子へ札
名まそ女のきらふ主
唐のさくらに不胴の蛛掃
子の由きまを慾に仕立る
日頃の[illegible]

寸翁

一作わかるゝ方し
実情ハ実情よりから
しきのあるもよし
猿旅俳諧より今
其身ハ府人一等
の詞をとりてすを
飛よるよし
或人是ひきの句を
問るに此句前句ハ
狐ならぬと然ふ御
し情を用ひと
定て一体あり是或
ハひとりふうしも限る
ましくや是川の変

東梅堂

使ひ待しても主をまふ　ニ
梅打ちハ武夜てみ新る葉
自警居て平ほも嵐中の庵　ニ
猪煮てふみて猶りもも居ん
行くとる月みさゆる立見　ニ
秋のまゐく古帝へぬけ来り
花てそりぬも此子に　ニ
あひきの里とて姥も蘭かり
春あり乞さ巨姫すらく　ニ
子一人もあくや宮女の寂し荒仏
かゝしいすも気ひきそしゐると　ニ
乳黄よつまうて只へしかみ聲
床かの落書と一字ハくふ　ニ
今まんと指まつきし　京の人

里見みしく万次ま
尺へ寸りと店てその
多くありてに氏白鍛冶
昭東の中文歌を改
ろさ生くてつきき部
へんてつなのひかかり
みぬとうわハセ彼の
藤の毛鉄とかへて
よくあもものくまう
まそ判とえきりもと
いかしかけろは
催る示る家つとま
やかけろと呼くと
あま鉢くし

相應菴

一休ゆつつくし
名所　寄
意　寄ゑ
三井寺筆
寺の名
母　子の歌
おりてよし

悉くに悦き双児ゑかをと妹の名ニ
男忌しらし　亦弟世ちかゐる
さしうかきし　点やえしきん　ニ
ちきりゐる芝居一幕　積るしして
盃の浪を立えり　次るると
坊主かふろ毛禾の　まり山
あの白牡丹で　開き　ニ
寐さかりて　むろうえ文　元君ちゃかす
諸ハ上地を　さそふる　まも
附る地名めり門を　わきかる
衣をさゑし浪人の　妹　ニ
瘡嘆の床つけハ　出るきりしを
ちさ小して　猫子のぬけし　白柏子　ニ
人目わ　艸も院涼の　寂れ
玉来の中できあく　ここ二か
[illegible]八[illegible]の山脈かけろ[illegible]

杉浦晋和

諸たし三井に阿しく　まさ小して
咲の桜そ　よき　花王堂
為楊の　ふいとんに　二人　寐て
京の鬼え　ゐける三井の　妹　一日
八朔の　寄み　慕帰の　冬筆
吼次も　杉の　笠の　峯　一つ
うきまの　亮み　茂て　殿の　罰
芝来　あくしも　御堺の　忘
受けも　弥き　芙蓉する　の　春の　名
極女　大る　月み　さかり　ひきる　盛
群の　兎と　常　盛ろ　そせて
饒　祢ら　大内　ハ　姿も　七小町
消玄　かりこれしかし　葵　咲く
母のうつ　砧ハ　色も　さひしくて

あらしくれ寒き揚屋の玄巨燈
あきれハ又麻布でらし衣士か名
樹と寒さ芸とえらひて夕菜師
伽羅とめでまれさか縁のそうと変
伯流をくみへ風流家の寺よ夜
多の旅も稀な従派ちく寺の跡
筆の青み茶あ寒き天王寺
さくらよ京のなめらぬ寺
傾城の袂いふ哀ハえけしくて
枯もえて深井へ渡る竜田姫
菊なきく白く新造の花
子をとめて色の干んきを忘えて
傾城の命ハおくれハりとの乞
母親へえ知しるてる浪浮の奥
虫干の雛よ向うるうみそらひ
注流よ高尾か良の婉して

一石房

須磨あるといへども須磨の方点をはなれし中一句冬ろうむつかし一句ハきんとも評せられるところあるかなしとかく一句をとうひてきかえらと云なかしるかよし書たれまえし

洪珠来

京ハさみしか錦の当さハ室よ捨てのきま始嶂の寺し泉足てもまちのうろさき吹出物数盃の眉のあくろの目まつきて膝めけの手つりくにときくえろうみるもし京ハよき不二の素向よりそこしま掃よまよる池家の様さ流義へ行一分午の玉あまうなりつても又高弟のそうまうれ芸談の点みえうまと見かかひいつの世の美みもてうるえ須悟るえんとくむしる気色えびもむさたくまよる意精中るまの名とあけてゆる名

そてもよし浪
こゝしらハきみ
てらるのかり　かちり
称ふのあるおもし
ミの句も　よあり

うむく瘡てまつき看病
香箸もちて耳の垢とる
中行とるをとつ古帝のすめ
まからしられて松原出とまる
あとハ酒を行を招かへき
引のらしてもえしき二人子
多加木の坂に師ま一筆
行の野中し血血なましん
列卒待らひて目の痛かる
むかう出しるる妹かづん
聖え日の床身ものしき
互干怪有をかくん看病
武家血をえぬうちハおさまりた
んよなわせて後し待つ傷
遊ひ許めさし所望の歌中す
陣屋の扇風やちとまおもし

隠里軒

隨分まるてし
平沙泉の気味
大ふあるき
神祇　文政
玄
買先のたくの
まと六てんと
まわりの作るて
めてさき白作
おしミの句作
呼ぶ嗚もあるき

今井立鼠

いせの御ち仮家と母の朋てきれ
爪きる惚て取けハ賢女ては
白粉に薬香の女房のとらへ化
吉原をこ不とも志りて桜狩
長爪に茶碗の藤田へ召って
是非えりお情の総の写されて
ふ旅の名引る壱匠のさしかくれ
山毛の家も茶を関所を見
宿出女の権利とつるを楼法
流費の法よりつきき気あて
囲玉も湿気場にある内女婦まで
住みきなるまる例て尋まくら
未備とさしまるを任杭のくれ
袖さしき勝しいはの栃てるし

おもしろして
はなれまし女中
に行るへし
君かも嵩れ
かましきおわ
くつけるも
白もし
と
亀

山吹ハちつさうまれぬ咲所
世の乃々わしと涙添の言ふ
年頃納めて夫婦よく寝る
濡とあしる夜の為原
矢変のるかと智月りし文
日まくし忍しんてゆるさぬ節
諏訪の地に出まよく筆
根ホと出てしうらむけいせい
国の名ひよ妻焼まる親
旅人も喜元日の不二
赤内音歓と分る親くせ
夢ちてゆる丈子ハ宝なり
おもしろ8梅ハかめる揚名
一家とそうのありめ気韻
はほの人へ術を焚くち
大雷ずし花も奈拳れ

銀花斎

強弱あるへし
おもしろの句
ある一つあり
楼　船
雷　尾
淀　伏見
湖上の京
京のよそ京と
そうてよ福あり
京都名
をへて名所

立賀

寺の棟ものよらハ隣しわる8
見張ともって妻子上露の
よあるまるとてあふけらる肱枕
よ枕の夢中あしろてかの雲変
時々ほハ羽毛く和られて
墨の絵高まる足のうそとて
かの京のあしらはる寺の友
ま読み剃て此さ件たらひ
数ありし此児み煩まと歳て
老ふれハしそ大矢の膝枕
目の前ハ夢路しきほふしきれ
這ろて銭へと商人まる名称の位
ありらる寵葉よ娘奴の角おちて
かんの毛惟あ勝まる枕まくら

女の情と句作
つよく作る可
ねらひめまきの
句ハきらひと
又申る
右數　實意
作とあのもて
おかしきとなと
まへし
上よりあと師し
て記とかりろく
ゐくへし

其日ニ岩もおゆみるわがのう
竹とへし折る其の大力
これと拔る笑ミの安ミ
是ハうらしく清就宅の梶
梅の陰の櫂とえる萬
をられし故の糸てたえる
済る蛍手近て来る身
狸の腹き主の鳴りね
宝物あり懐忍の二字
兎主のさくら女生餘
旭つるし安仙ヨく
文姫あり阿豚と怪石
兎ク加勢侵手し渉る
あまりて至しぬ極月の昔事
二日えぬらちこそと剃るけし
八十七も翁入の年

蕉雨菴

一作語き方し
松　梅　楼
杜若（かきよおとつるへうれ）
楚　桃　雨
冬の俳句
色情
五常の句
鹰　狸
狐　猫

浅艸鶏屋

我も出へとうれハ火をと斤又潅し
後ふ名二番目の五節又させ
大けて要られて出り蒲簾
吉原の遊女ハ女房も袖呼し
居續の遊女へ嫁の迎む小宮迄屋
人のほと宮乃ましろる生れむ
村しれ荒れ白今の侍女しく
羽二重の人ハ恋さぬ小袖幕
不二の裏のうこと陣所の襦伯て
陣の道る夜なる手段半不出ま
省えて前さく付けぬ山かへり
子と寝せて皆し張の拍子あらし
まへおまふ庭く扇とたまりて
俳諧の作とりもおし了小盃

胤　春の人
秋の夢
夢の浮橋の
一休の咄
ふるき　ちりよし
夜ふけは　まつは
きよしひあり

菜の花も千両宇治の釣指仏
松の風鐘も浄経も吹入し
ふところ狭き二度目の杜若
見限の美男の金の口あけて
す往音の傍にいへる角力
草からぬ訪へ死する　欲のうら
山下に於と姥の果ては下女房て
積山の神輿にひより　残研
吉原の見つるやうなる香かな
うれしはみ尾えり動し流しる
新宗のなる服立の片身れ
初音がし名福の口吻く
女房の礼のいつも杯の香
頭巾の内とふ見ぬくなさけひ
雑兵の夢も苦になる目路
又卅匁年か高見　面

玉蓮舎

せわしうかるかたくし
前書の詞
杖にかれ
石数　見情
書　單
人名　短冊
梅　杜若
蓮
添へて　柱掛の
花よし
雪月花は深く
仕立へし

島祇道

あらしく中にかゝ杜宇
春日山出し月かもむしくさます
けさよするある詩歌同名
仲まうるに椿子のさへとも
鉢ある日と鍋く来る豆腐売
呪六かいくの明ても杯句の肉
さきまる物のありさま柳
伏鈴の耳とそえる桔梗花
境論に興もちにこれまで
若者なる形の尾に秋の句
旦まもしり擲の傍に六の香
方違ひ忘れぬ方に白か落る
古ちとまくしてれ春の人
家様飛る香は若菜まゝし

寂寞の夕
多くなる戸ぬり
いやしきる
故人の名
蛙降　當
ゑ穂の地名
よし

桂て飛蛾切るなり摩仏為
高舟に画きし高の山なり
人の間の抑香もよし
女の忘地の衣伽し返りて
寒くせ唖もあきく何ハ虫
よい点をとえる夜の夕くれ
かくれさ泥添も文京の臣
かけきり白き未老の眉
あわし斬踏る落ちる月
三井るさして女郎花り
伯母の更見ハ意衣暑て
児の針るる紫衣の従ひ
みな髪並ゟち佛ぬの伏
御の袖もみの中将
舞も刺をりえ従舟
末廣なりに玉川の名

摩訶窗

一作ゆつりぬる
句作あり
買多
学の忘句も
よし
地名ハ行出よ
てもよし
まぬ笑と吟ふ
さらくとも作る
へし　かつきち
しるハ上まぬ之
之句の書ろう
許みさろると

林珪山

往の傍て枝折ると枕折るを
前の松も娘もつくりあり
飛蛾しく不夜の霊屋の僧昭
艸屋の書みあふれて精舎り
鶏頭よ佳一葉　須を並る
年中の太うらハ橋の出来
今川て誠くも哀りく秋の花
新造の脊中しけハ嵐出て
下画工太夫人とあるハころを
為原も樂屋ハ几みなとをほし
貧小競外よあるろのかし小絶
せ示や蒸一つ忘れて更と楽し
風よ硯破の出茶屋背むろう
納涼まて帳柱実のよ升酒

外しへし
倭漢 漢倭
俳文章等
猶教示添削
需ニ應ス

蛾婦人

弱き方なるハ女なれハなり佛家ニ罪深クつくるへし其の身ハうけて家なきうへしとらし女の情をおもしろへし男の為のうへも女うれあつくつゝるに損なし古今隔氏なしみかし従ふと

君か代ハ幾久の松に聲の音さゝね掛かる日の本の停迹うつりし来て尊ふる江戸又云かてんの六條の葉所菊寿居のるゐまきまひらき画記書さひしい略せきの壽子を抱上るなくれの不二姑々の松を定め初霜不見さ男のいつも門跡蝶の声まて鼓笠にうつるかつ又傘を貸さぬ清まり蜀て踊しときろうとる書あまり無病も下卑るための例破れ火て後縁の領藤の名しけたうく湧泉山一字も川うると俳の名人

眞澄

三條なふみ白かとてもんなもとハ出女も高く〱軽の衣とつくし温泉山ハ秋すかし表うへまつりの姑も佐ぬる尼ヶ崎栗さう咲いのと婦の深さき娘るも知る中に紅の椿梅し豊家をとめらひのふあつき云売身に上る千てに以テ錦きぬしと眠る錦に蓬路に紙雛の並くさる尾久の里椽先に夜の鶏の初むしろ舞の人〱切火に飛へりるころハに書てほしき千老吹ね梅うしもまち掛吹きと清見寺

いひるあまう
こゝろのうそり
ちるをなき
名月をよ風情
あり　おろそうる
流るゝへき人

栄く家の昔ゆかしく梅　隠了一
權吹倉を加田の賭山風
跡とつよ生ろゝゐ尾形しさ
琵琶の調のみ念し五月雨
綱の花作るあまのたうしこ
浮ふるよ驚さく跡いぬ巻れ
あらしくまろゝえても果深
世上の秋の出訴ゝ旅泳
絲へのるれハ其ゝよ実生
京祇の絲と住るまち雨
まみ庄舟ハ翁のうきさえし
業川とうけて消る妹
詫ハまの花陳愛の居風と
着の帰を波のくる住吉
芹ゝ振よやん三帰の素顔
関岩重のうゝよ能百合

梦佛菴

一作よき句　よし
ミの句よ意味あり
追加名　京都俳
母　　尼
娘　　年
妻　　弟
女房　子
僧
生れ
聖一句をおすゝ
しくたまへ

堀國香

争ひし車の路よ葵の葉
假字ゟう男ハ麻入りけり
香店ハ花の塵といひ又て
灵山の穂ハ不二を帆ゝ見るを
大よ肖きうりしとて秋の蛸
去ゝ脈尖き人あつき越の手
入定古寺よをひし菊の散
長陣の矢疵子まふる秋の風
肴しうあてゝ法よつる舟
もぢし上るよ如くしうる娘
聖の花れ見よ雨路裁つ尾
鶯うつまそハ住る傍残
雨のさくらで高あよ姥
待るハ字くん看童の栗古名

言含もうさまの
息あり
鶯　桜
飾もそも浪ある
桂馬うしとゑる
牡丹ちち切よ
限るつし

形茶ほこ八し　あふ実の素湯
菊のうち尾ヶ唐ヲ刀剣
江ろうち知ゆつまいる為かう
其の多い桶よ椿咲　市二日
浪さうしめる宮の御味方
玉川よ桜のあきハうしろなれ
果ハさくらもむこき吉原
さくらの為よ燕尾ゟ一さし
筒へ立灯もてきすの　桟示
篠ゑもあき　彩ひのあてか
さくらより千なの母業なり
かいとうの為衣桁ゟ乾冬
けいせいハ舟よ醉て手袖の梅
むまれてあるく不化のかこちひ
硯をとある　呉山の書
江戸古るゝか落かのかし原

一艸庵

羽きかあるつ
行そ久まへそ
よりけちるよし
あまりしきよ尔
あとあのむと
えつまり
近来の佐凉
兵の支保すて
足色と上下へ
引かけるる句　よし
黒政　恭重

室田徳兵

志翁の庖丁をふ南禅る
着加とるたまりのあら外茄子
於妻ハ猫字の誹仏と佛りて
為兵ヱ篠かけちりし唐の井戸
曲尺まよ人と並ぶる太子講
画れ脚の不二を書て画れえ
子宝のうちよ麻あり落あり
血なるえよ雲ふ浪もあしらきれ
逢テ見よ蝶さ勝の云うむへ
神ハ伊勢白子よ佛むつましき
余語のんとみゆく玉津島
其ハ深て象戯ぐそしよ皆明王
乃のしと母も詫てる人也足
又魚よ形匠ヶ肴のむかつ

ころしはしぬ
すゝめ住之へし
かしみするふハ
ほゝよし

行脚一疋におもしろい翁
去年松より住吉の去
やとりてついぬるて糸衣
おりまよとての宗南で宗舟
隔年そなせハ毒毛草
えひに洗え目うゝめる
碁盤ハ盖の隅に目とお
姉か小路より秋祭ちゝ秋
高砂町をわしハ壺竹
木工馬にかゝむ鋼糖の階
黒髪山や雲のあけぼの
子にひかれて閨の灯物
白紫のあるまで黒本変ある法あと
松魚の壺より網もかくさ
出女も昨のうさ毒添
温泉の利くさまよゝる脉

井下芥

猿羽の内かし
ふいき方かるへし
天敬　偽
尼　阿陀
脱坊　庵
まちの人　茶の湯
多戯　像
つまらくの油
兎
買もハくつき
不足銭よる不吉
行そても除しき
見ぬしゃ

瀬上雙鳧

阿陀然は世の為とて反故揃かて
うき意ハ忘れて釜し扇より
掌灯あんと東の方より
光法の都とへりし琵琶の撥
至人相すて能く汎ある縁
讃波の風に荒し出於
母によする郭　譜状
食堂に擂こましの高軒
陽池肉林より夜成まりし
門にいねつむものゝくの尼
うきましの筐姿ちよ娘か君
警　投るあし海の中
千魚のうへより康煕の文
故やりへそゝく面前の龍

桜坊一家の句作
秀へし
いつまでも附と
云句のすぐれて
家をなへし
古家の調りき
跡によかりあり

月夕惚

添きさうかるへし
地名　天蔽
虚無僧　桂坊
降まの　風京
馬　京
傍　子
云ハ　女
女の髪
右の外何れも
おなの字のこゝをすゝめ
ニ実情に佳き
なる句よし句作
あしきはハなる哉

花ちるとまかりせしがうちかけ
に和睦の功に忠人と撰れて
修正の三五目の名に帝娃
待の梅支雑とかの降かくし
凱陣の胄に為帽子りくて
伽羅枕切て大丈夫の息
自汁に時りて修のまちく
蕣馬人も掉りの枝娃
六具かさめてうつさる縁
備なる扇寄ひとらまのる
多芸翁の手依撰叢に見せる
荒井ぁ佐本田に石の請うて
桜み死ゑハ玄そとま石く扇て
魔神と祠る荒様り許
此京衣とてらま音つはへ武
嘯きし　幣分只て居る

杜和推

京の山出京居も皆ひとりさて
市と隠に蓋をすへて若苗
牡丹の三娘の気くおあ川まあり
滿家に躾しの力のありれて
鬼の画古寛の居しに亂へて
禅退して居る給和尊中しくて
吉原へ同きまらしの梵字偏二人
剃るものと云へハ見も服しくて
気ハせてゐるも白歯の名残そ
此せいのうちよくて身につまり
使まく菜の礼状の届たらて
子祐君の句あとるを画きかひ
培俵つけて葡萄の房と馬
拳の葵の春をとくる　雨

みし一句の読ひ
合めてしきる
とれ合文所り
ぬめと所く仕立
ならるとよし　一併
附彼ず一句ハ五句
よる梅句きハ長句
よあハの継る調る
句ハ何まつれよし
長句ハのかくと仕
立継句ハ並りぬと
句の三ミ字を全
まるかハハ也併ナ
よ読の是ら在
甲乙接るかして
ある與あり

唐の玄宗ハ月のいてぬ伽
旭きしてと咲る雛よ照
枝子の美点ミるものとし
実めて王土の句も曲らん
木工馬の脚と蛇牛足よ
牡丹よそれるてんかくと燒
りのといらせてみさい虚語僧
縁練納て先つきゆるある
ゐ曹らけ作る姿燒
大盃をぬけるしる家の
墳墓ても八能書所しき
馬鹿つく氏する舟有
丈婦の二夜よ通る白両
貞女るひしき加田のいとあき
家蚕の扒よ画所の足代
来やむりしと橋のことにん

茂園

張弱亦る人て
寂るの夫示
地気よし
打まつもあろ
し紀地尺多
てる句よし　出
算く作りし
おりてぬらよし
買家　須埓
飛送　岐有
世りて　亮九
形気　高泉

扛春禅

拍おろされし鞍つける孫数
咲橘の菓やしたと新暦
さうせよしその亭橘する筆舟
蛤も燒あハせその時庭家
女房る画かきの足を洗ひぬる
家の母の地獄谷うし
信飛田もし附を咲く医者
都鳥猿の古跡よおとろうと
お家よ売りにハ戸方あろて
盲人の家をよく失しくよ
業苦てていれ不役の吉陽
算よ入る団子よ衣見せる書
家の悔るわとる女房
常香の得るさ月のはのふさ

く成　定見
よろし忘るゝに
言よふ多し　文和

雫ほと笛か冴しをかきわるゝ小法師かれ
ふつらしさきハ笑ふあれと鶏の杖
炊櫃の向きを産婦にて世あひ
元三和を袖の也紙謡まセしと
売春まれる解口の下
貞女も女一矢射てみせ
安喜に暁うましく古稀数切きて
腰屏風むつくと起し子の天宮
家内　呉羝と云ふる鳥足也
嫉にめしくと毛見のさいふき
宮の詣ある湯を強いてやる
厂的も様子に囲しき松の民
枝折子にる又鼎の拝殺
故も柳へしと序る山高原
広蓋みさしつ入る彩揚面
大きな家附金とる亡八なと

自在庵

世わしう行する　方よし
元日の氏うりを
貴一よかる下
身を去ましく　もてへ
買家　忍見
彩もう京の名よ
陣中で切り合
せぬる不忌よし
古田女ちの絡
まそかし　渡宗
あり

仲千頂

放たれし虫歯さらせる
かきん人の為子を祈る伯耆山
夷の舞に腹をよりさり
鬼ありといひし死ぬる医者抱るそ
ふれしくまぬと大門を出る
正気なれ酒通しつる跡うまく
孝ふけるとそ忍ひ切る言
看病者笑ふ一つの瘠せ起し
貴おしえまる旅宗の郷へ
忌寒ろ増籠の中をまして
釜焼の妻のむ紐も喜ぬあり
母の手すり妹女郎をとかりし
猿とをおのしまる　長陣
あそひ通せしみやこ一見

秋の句古代
めきたる風の
不易
なる与する
光也

鼓打ちらしかけて尾の看経
嵯峨の花の梢まで念じ候む
弥生の春の花よ夢ふらし
雪墅の舟の纜ときかけて
布施なるをとまりをこれし猿猴を
飯台のけとの器にくみよみせん
かすつとのんて天文よりまさる
よき泊り中月鋤と剃る
對陣に矢の一節すつ射ゐよ顔く
香炉に西風嗅せる噂の外
居酒屋のひけ主ハ客の書るき
扇の紋ハの一二本なし家
日の夢ねてちる子を思ふ妹かまて
つらき命ふ子をかける篠かけ
傘をひろけて家をを送る膳
帰路せし路の落ちに落ちし

野樂菴

おもしろさすこしある
附合達一毛
三句のさまりは
まつハ田舎住道
部作の句まさり
とらん也
家なる作
世帳めきたる句
えの句古意と
ゑらす子任言に
実様の句を
要とせる作

樂笠志

唐着て桃に縁ある女の子
又合ひも露まへて出る上莚邦
いのるさしろハ望を伯母とも
邦の灯て升三つ違ひ居蘇袋
平兩算の例とし剣緣
日枚むかし琵琶湖の洞の狸やせて
今ひろひの錢ハむかしましん
一陽来復何豚よ車売
遊ちして来てもこちの花の汐
振袖ハかきまる御代の姿まて
思ひ出し　隣る宴の面
宝らし　子義のかささへる
師走まて出来し家後
よくしと帝しも笑ひする流を湖

あまたある中と
己が句のみと
よし
あしきを
えらみ出るなり
みうつくしく
作るへし
ふる人見とふ
りのえ　こへると

調布も惑さゝすなと名くれて
汲つるゝ井にて申る白張
一夜宛舟の大き城る姓の川
詮出に旅と振らせて路遠
川支うし又麻くさるれ
時なりなく八葉ま子ま藤せし
彩あし上ら後の日のうらてるま
今よ字屋と撮しのよくかる
攀らし積納仕て勝抱手
又一羽添の物きて入るし鳥
するあしやらひと来てな旅出て
かしき庭の積に見せく
うき時の緒に縁る鳥物くの旅
附る庭住の声の流るしろ
循へ放せて叢生し　葎
千名する春了帆に脱し寺

三喬菴

ありかかる方を
底たいするとな
不あるへし
世話るやへと宗と
しきく句作ある
へし
とらし意の句に
よからえし
猫犬なと
も外生れて
百物作とつふ
句第一なり
も縁ともの

觀澤来

する能め菓をあくきして行き
おかしき守物り下にも歯とハ
桂の見賤出る所も庵儒老
本魁しよ後も弘巾の耳立て
松たるとなれハ乞食も習ひ忌
足訊て切さる金ハなくなり
肉屏の側ましてしハなひり
香爐の菜蘐鳴りなと様故き
桂男の刀伸君にかつらせて
義入の姉ハ白髪と又生されて
をもしくすも嫉ハ嫉あと
反迷ふらちも来さ意をてふ
名あうとふりひく堀の斤ゆる
时ふハよしと菜みこかる　算

句中におゐしミ
とひこゝみてより
寸松点の如く
つゞりて句中の
意味を深く
はさへし
当句ハ未の字
文字へと言康
にあるく作る
ところ気角
るよる又如る

然く蛇とよる関ちの猫
芭蕉の穴て嵐と謝ありり
秋なしさかしるも在續
堤りの片方破りてまさ定し
紀点を皆すまけし抓つき
今入るの耳につく旅家
にもロもかゝハぬ意を疾く見せ
意席の深さ此に記あり
作家にこれと涙ふの片便
むつかしく鉄のやうる奥家老
仮名のみるに破戒の糧と成
凱陣の際に深名と立あて
此格子の角におしかれの硯箱
蛇の痕て赤くなる妾
山陰と雪と指に路を付て
かくさたちひとしのむ本な町

大夢菴

かくらある方し
されとも句意の
そこの傍き方居
神祇　天象
かけ合せたる句
作よし
沼　水舟
水のうへ仏
蔵伯のふひ
仲秋　兎
無し　燦
極や　徑氣場
橋　伯濤

衆灌河

色裔の皇のみち色ゝ書きとき
君と何をよ松崗の椎の丸
分切ま益意自性とおし如て
住訓し花迎へ居るたなしる
生酔と麻させて笑み小まくる
猿不の秋思ひしくよ個指ら
蛙嶂し流れよ井出の経儀
子為書の隙子涼しく残出りう
信もや雷あのひまハ莫さくら
力あく雲の様るせ芭蕉
旦藤らし舞川出してまふ稲
乗舟の係の蒲久秋とし
延ぬけて中へ麻こゑあまたの人
格子に大まう亮まつりらく

一体古今映句
に体もあり
募志に似る
不易あり
諸句のミよう
と意味をへし
まで作者の
道をと云ふむ
ろとも諸の分き
句は点にあるり
し
おしえは後々
今なあるし

浮保の年より庵し小紋見て
赤穂をかて母の手ぢし
二階は冬は経師座の望
新縁にめる将ふの枝手
細見とある妻の頬杖
浩きるしる桂なつらう
梓のうらみ一座手に汗
仏は年ます六々の梅
蕊冥ふうすをと浩ふ母
まとめよみて氷りうし年
楼浩りし継ぎ頬杖
母の杖とするをし孝行
条て被をたてむね亀口
大悟の迂化さくらちるく
面見の美見姑をいえする
鶴舟り俗とかかる発む

自徳庵

強弱あるて
何とはふ　只見おし
諸賢一くし
歎教　人名
玉菊　錦山
鶴響
信誼よし

石川允鳥

又一吹の蓮まて涼風　ニ
ましろぬ言の行の共あり
十年ぶりの君まで友送　ニ
追剥のがん子頭巾つい眠けて
秋淋しおき文ようき隔て　ニ
今あてうそさ色隠し玉菊
里のたよりを姉の言ふ　ニ
今さしみ苦界の果のくつうしき
瀬々の窓隠こみる恋として　ニ
やうぬよりを夜の公事
領欣むと影の若い日雇　ニ
一本きめし居司あたまつ
巡りしくて日しし山なか　ニ
かよふの動経蛇の旧きれて

ちさき葛に露の日向もはゞかり色　ニ
引る鶏の背干まつかり
な笑の吾顔飯の見つるし　ニ
蒸おに事も下るハお宿る
若さに愈て去春の日のうき　ニ
牛ハ麻て居る所浄之吟
あるらと家の支度出来揃ふ　ニ
何許うら飛んで来る鹿癈
猟り弟後て文る麻まうる　ニ
三十を越て女母の衣を栗し
附るやくとて救戸も扉入らう　ニ
本そるの象を前おつくり
ちよれし　ゐの若うる新座　ニ
一樽の寺の然き人師の紀家え
けり遠よ舟に酒をかけ奈て　ニ
和旅大八の名をきまし

茶都庵

隣家あるへし
しけるきる句
名有　よし
京とりふ句　京地名
京多　又叛
旧悟　桜ノ
桜乃　旅体
ありきある句
めてしきる句
女の世話す
古今の句

柴田敬忠

故人の状を旅麻の宝舟かんこゑ見えの為と帰これし凡あり子辛の皇居をうち捨て陵の一ありよれる優しくていきれまりける度衷の朴人陽咲く岐有と鳥山原の仙引くも苦出る虫二十の銀あるとりふくみ行合ふ山桜標かましこ京をえおろす妾二人以備ふて睦き月る竈おとろくく腰よするる縺衣あ見の寄翁よひとつ刻色麻るまて八咄のきふしぬ女あり一日勝手し遊行待つ寺

白雪し
かけ合なる句
右いつれも附
と吟味なし

盗人の隙を伸るとて垣竹
梯集の芝居の上を渡りけ
舞〳〵と生捕る滝夜叉の真ハ
大殺ある時太八守へる老り耳
辛敬婆を招も波の指ひ本
様をして若害ふ中る敬かり
物の師方弟の始めと刺捨て
持出るを税け八女京をりし
豆麩屋ハ是り幸一二ヶ女房
太薗切る棒の師匠の弟とし
古地の巡礼の棒を接ヶ知る
さくら咲まて八坂の岸ゆかり
京りくえ坊や祝通辛く事うつて
米秋と小倉をられて地田の杭
志賀まるの屋葉を茶をす古足寳
涌作る小袖の白き京まつり

霞隣

言 極め
者番とよの
仁持を
作る也
竊盗
といの指示
冷ふ句を
あてゝし
作る人
此句えしを
まつりし

峯雪飛

本屋町の生一葉散二七歳
結合もなく〳〵講うつし辞
武士八女房の寝さ詠す寝る
大屋を兄まる隠居さ一要く
ちゃうり下る川岸の猫
傾城の新房ハ芝翫字に
持仏すゝ女の物さしふ黄金要
これんと言らし京訛の板
彩る時分し佛ます歩に
合て世不惜好ヶ傾城
素神ハ時宇弟りと修の形
肝のつみまる蜂多う婚礼
妾まの是は白のうきやう
茶意まくれさ飛頭蛮俳体

好くぬ底に
よあるべし
額白ハ面細
かつてよろし
まつむかするに
あるべし

喰身ハせぬうと婦のえかし竜
をつきはつむと寫く朋戚
清かきれてもよのむほころむ
一分残しそのそき罷ふ貌
松明て思あきし大むろし
きをとえもしの巻折を喚
詰出しと盤解するをえせ
紀まの德揚包の火鉢言老子
ちりきり飛るる安如郎り吉
蝦蛤あすともせをとお新舞言
人ぶ怪をおくみえ牛し伊
大津画をいせろつて来る面白
二ならきまての結状
病用をいひつて義医館てみて
来目へ四ゑ大へのをる地家の枝
まろうへおかしんく正直な人

百歳菴

腹き方し
一筋古百方を
のかうしもの不
よし
斑頬 旅飾
る背
不二氣味と
むらむける白
蒟蒻
こまつの桜と
つまくおうしきど

武山滿布

盲馬よの嘲る方へ謝て来る
まくえれハ眼表の女も女なり
様ぬ日も会羽見て来る伯父笠
るの背ちうけさ呼なるとされ咲
不二ハうる氣ハハ飛る日だ晴
若入の出てお名和と言ゆれ
けうりぬ声の体まよ目ケ以ぬ
山伏の地よみうと肉おあるべきよ
あきえてよく又為毛ふる若徳子
猿の住む岩ちへつ大の如え
首川まれけ厳との如し上り
所道よ居後見るもかうしくて
図画さうさく何不女し子皆女
さいて尺よいを住安信の虎

かけて作るか
ふしと云

へそと突ぬく牡丹餅の釜
大匠坊とよし姻てうり
出し取くやうな松島
猫かまさいて琴の言法
者のやうに作るらんみてく
様なりんで万葉とはく
二見の垢離は浅衣なそまれ
関原か来て出るくる筆合
蕎麦すゞる茸かれの名主
宿の精とましく丹羽餅
三代る康て狗の名人
馬骨の中て田楽つむあり
不二八たれて古気散うりとう
らんまく翁は去ねとはく
大かさあり筆まろまる
詩ハつくゑる今よかな下戸

由来庵

強きかなり
かしわるぞく
あるすきぬ
よし
謂之白のあり
とよく茶人て
まつりとりぬ
たもしきる白は
良あり
一向八左衛中よ
又へ千鳴謂の
中りかれしる
あま物を入畳て
中くやある附

桂味道

香病の礼は芝居と見せするとて
気ふ勝るうちてすなし
説文焼て金くれてやる
以ふしもやる加茂の芝原
談子とはて京かはや
さき空かんする羅の陣
まで吊は間かるるの
中川まるやる館林餅
金剛山ハまで見やふ
世中で地名の連なされハある
尾根すへ御料の名矢つさして
為るしやといへとそふまたりけめ
餅かぬけて古流意るのかよし
宿翁て飛脚の飛散出るなり

ハきりあてゝるゝ
なり
三のゝ花見も　未
人へ向と
京のうえハ
二夜ゝまのす
惜く理屈つめ
のゝ句
是非うゝしと　不留

三執切うして悟中るくゐも付けるゝ
絲抱てゐる花のかをあけるなり
悼引のあさまえりみすゝ前うて
ひとつある両者みせて医者を饑つ
安隠へ春ふり詰て仕合りうら
りくるしと梅のまの風ゆ
ひやりひやりと隣りうまし
柱るとえせて是なかしかう
味噌と分ける小西様かも
旅人の是へし参々八世々合りん
覺並へし東大寺真都寺
えらりと眼ら入て箱根山
蒲々夜ハ齒のをゆけハ疼るのる
性呢く〳〵に佛し　生玉
酒の香まくわる謎々
旅を来てし別し是殿

師竹菴

さゝくと降く
こし
ゆきおろし
首句の内には多年
きつと降る又
目まくしくよし
附句は句ハ初編
隠附ハえうを
京　旅
凡京　兵衛
うかさによかし
あるへし

越谷吾山

ゆへと許しくる桐の月　＝
謎のまろさめくゝは版素へ乎
丈ぬうして百歩包横々さむ　＝
赤飼かくさぬ身の市立
伯太口の秋のおそかし　＝
学卧て来ると薬鉢ハよく扣る
凡の名りの香い啼茎のる　＝
意せ也ハせぬとてこのかえうしき
旧のめくきうしうと翁　＝
名のある狼書指さん母うし子
名すも似そ小春の宅の若気き　＝
鞠にすねけハ出会て来る医者
酒に席あれと日比の呑仲ゟ　＝
敬正宗と飯臨々さる快ゝ

在中庵

孫鶴と名つく
さして流気とも
おしころく
おしえ第一く
世話す秀んと
かろき句まて
随くと雅中
こゝのこころを
味はへし
地名天とハ言
まるすこと分と
分へし

古調 和嘉頼

剃る髪をおしむ代脇ニ
大息して伽羅盗見る苦中ニ
忠ひても祝部か為の情ならまニ
是ハや狐の新しき開ニ
弟子の炊番の待ちかしニ
名ゟとあめて母の夜限ニ
世中の松の影と流るるニ
立かく略追ふる毛見の徒ニ
咲ぬ花おみと夕出の跡ニ
抛うしと垣ゟ見られハ居二人ニ
ひらりくして急か飛ニ
兵法はかゝるといふや先示すもニ
一ところの衣裳も時のそ守る場ニ
死ぬ覚悟して諸涼しきニ
間ニ和そハ乳母か先陣ニ
桜什ちれハち笑土となる

塙宣我

火宅を出て薪て茶を煮る
姑の鳥麻志生ハ養すの
外羅子笑ひ借と妹か絆
のかれて見れハ廣い世中
梓て来ぬますかきく啼かれて
於う死て見せくと僧の肱枕
き守つ嫁とあてる多く居
抱き子悩る夜のくさう
積のまゝ丈のもつる産の伽
吉原と剣く作りあてる猪螺
用きハつくおしさきの袖
居眠のみけなく見ゆる大女
小判とつよくもちく殺算
安房和のくゝと芝の続止む

けるるかし
ようあり

耻しいすゑすれて係留
上元の点へひいやりと梅
先て第一き籌傍場の風
春秋も中楽無妙甘丹よし
向ふ見へてる府子川留
石屋て妙けハ新きる院号
るしやくしと情て雑市
八朔よ発ゟ足の目みちて
藤継み双六のえ此そらし給う
局のおわこへ告ゟよくる
伝もみんりけ尼の大口
色牡丹かくへつめれハ日も九日
すものゑをゆふけいもの母
中まて折る枝よ梅の花さうり
神もさる良の社家よ百の賀
胞衣よきふきち元日の織

鴨脚菴

強弱赴あり
猪甍よ
市中ハかつて白
ひや夏の月
あつしくと
門との声
夏と硯箱とん
そくハ
幽篁裏深林
人不知
ろのんもあき山
里の秋の夜ハ
月の光もさしハ
しうり
夜不とめるる

堀菜陽

之の手洗の女も一しは
よく見ハ輞川の賦ハ平愈寺
ろくみハ切るぬ流璃のしん
けいをのひまよありして山めくる
妙境の空の仕へとふりそく
今年勝しく亥も都府楼
ろや玉るくとふて日のるき
十洋坂本ハ飯の最中
さしハ返景深林よ入る
詩み砕て梯枝すも毛ゟ見ぬくし
指折きハ何あきらおいひる
数状の息へと包むも本かりし
そこを見ゟと示古るる啼
光葉み彩ふて見よる実の素帰

へし
為して工ミて
句を脆く作り
脆くして趣向
の足しれり
よし
読ミ詩や
季布謝眺か句
對そのかハ押て
考へかしこ交
こよし

とやかくとりてハ出来せし頃の燗　二
濤波見のんでかいこむ
川か支へてふかもかく　二
松荒に咽んで錆し穂の波
おそらるゝ中にも笑顔なり　二
庭根昔の侯とかハらぬ御溝水
豆腐かき水て香もなし　一
戯きりと点を見てかる法両派
忘れ種の遠列とれても退かぬ中　二
妾か秋まて横瑞くもあしと
おまへと告て恋ハし供語　二
大庭数傷空論ま松うちき
篁も許しくに京の町　二
宋儒の風を意とおもしろし
いつのまも手あつくお茶て　二
うつし絵な諸もある叙京舎

故園舎

一句和らかに仕立
付け遠くさそろ
遠く付るそ
に趣あり其を
うりしよし
物と包ミたる句
作よし　叢象
の句にも趣あり
地名
人名
遣ひハ
よし
芳姿　尼

加藤百壽

放免の浄土ハあるとそ北示
菊のみきゐてき梵字にまて
元揚場しき能治の湯加減
木の上よあのきこゆる競馬の日
不断忍ぶ卯月の山桜
屋蘇の香ハ丈あらしき文ぬ中
尼君のおるゝよんも尼
仇と数へて菩提もとる寺
恵杯もなく川竹のうけられて
居横の返よまき来て書返り
雛をとつしし紙阿弥あらめ
今ても蓋ハ彼岸てある
味噌ハ一椀あけとひぬ公事
ふしひなかなる充勝の陣

舞　僧
菴　寺
櫻　猿木
蓮　髪

後ゟ出
能来り
花八片よりきたる
中すし
京の白み手まつ
まくあそ生

一家とるりのありぬ京舞
灯ゟは枝の廊もちらくて
庭人を數へ元日の不二
失えせ錦るゝと名月ゟ文
中言るうちけいせいへと妙
名所と夢て琵琶湖の新舟
ひらく紀まゝを調へる市店り
けいせいは嘆えまゝを取まぜなり
針の稽へ常盤石さしうし
信て抱くまゝは大丈の衣祝
女房を又蛍雛子の報免状
細のあひ相打忍て来る母て京二
京のまゝ子はのませるも安おゝ
牙娑の塾の浅黄すれなくる
智自石さて縮不の豹尾
名職八常の魚の元日

餘力菴

録娘来るゝと人
よも流き方
まつゑのし
立　実多
上戸ゟの晴
京の帰
考え
世拵ゟてて
こかくおしこの
もつゝとなけ
て仍ゟて
語えり

正木呼童

袖一友ハくもそ踊其の京て
陥人の得ゝはまへき居君あて
服を土圭引帰る哭ゝ
女神と屋祭のをゝ子表まて
早堂み名を中う色る翁翁
うつぬ辭斗しなる狸子紫峰
お袋の小菊打ゝて朮八月
一人家猫みひられて大さいき
衣桁の角へ投掛る賀文
こんて一葉さえあひとつ猿
ちらの猿尻を打ゝ今し
大まを寄ゝ京を語る人
一枚ハ飯ゝるまみつる小倉山
かゝ塗てまゝゝときまる女房

あまうこしらへ
まゝ為かきらん
かり
消ゆるらみか
とをつし
かみさ不快る
よし

疲るゝと身修してみる者局
命て擬ひの弱年とれる
又以後日と延る理忠
一間ハきんと作の面ぞそ
すゝ上けも拗ねしける唄比丘尼
囲の笑ひ見し女徒なる歌
梶ろる桶に注連も到来
みくさ都へ又登りくき
世為抱へる者生の絲
痛くしくも拓く数盛
法座後へれく（日こえう）称賛
子の月顔に雄鹿かゝ母
呆見ゆく足情て阪を食まる
拗ねと称けてえいるか入医者
又会とハ又へぬ法績の歌子連
見るめられしも今ハかうしき

獨歩菴

京地名をの年
不為の句年
揃ふし
植物　揚屋
富　勤番
宝舟　石数
宝念佛
一作の句行き
あしらへする句
よーしを流行

交買明

むつこゝろ見の月命に縄の居て
拆分せし似て弥勢ゝら撫え
きりふもにふもて尻さおひく
能同ゝ畑ぶの糾く雉の声
一面かけろくらうして蘭
沼系も利てへんくさゝ庵の声
けい見ゆる錦雲の笛く
鉢主ハ流るゝもち流ち神
癖後のゆくもすると出るし
梅債懐る女房の箸
けたもニても死ぬの墓ま
質屋の昔もあらく九十九髪
ようもり月和のつらくけしら
清和車望の鉢幸ま発を出る

の翁隠居
吉之なる

夜字あるさくらも初しを高所
とまさるゝ其寒のあるまちの庵
あゐりよ拍子自慢あつまり
折しハ名酒よ酔ふ仏画守き
つとめの果と見へぬお肉食
万巻をよんさいしをかへしけり
書ハ狂自むさらしちり埃
売なしにらけしみさそふる紙雛
新世帯とくこきまる捕鼠
餅搗の日から柳ハんよふらひ
帰参うけしく宮はきとく
門書ハ年の内にふんよあらひ
開帳仏の日毎萬く喜
坊官の衣の下手柄かくる
ミ星一ツすかひよさくら咲く山
能ちけよ餞ちらつし高瀬川

獅子眠

一作句と開悟
本位を法ふ句
発ちらよしと
換気し
京地名　火作
生数　楽器
宮　附句
狂女　居
母　伯波
神祇　天数
おもひの様

谷口雞口

甚ハ寺務よまつらし初り
五月雨多のあハ川の水まさる
そこらといへハあちこち啼く虫
高原の叢を見てける秋のくれ
聖ハ快と家中さゝめく
売られとまてることされとこさ生
衣杉の衣の御みしらん
珠数持し親仁の腰の二重て
耳よ付する念ゑゝあり
星の灯のかゝけも世そ夜の深き
難めよ又も鼓を眺のつゝ
床佐きて姥と咽を秋の室
帝よこを捨て身がりを恋衣
妻と行くらく包む山科

ゆかしくミるの附
寄る声をし
深ぬ行よりん
換ゑし

湊月庵

一体句おもく
生ろるよ作りて
句主ハ強き
方をよ持られ
軍の得　姥櫻
狂女　湊妻
枕冬し　大教
古戦場の名
行気何よりん
換ゑしるか
以免見つる　天狗

主

牡丹ありけりの大の延ひちらさ
虎の尿油をひろう押せる
松風の尿静する頃ハ竹の音
今年ッ角の若草るる　叡山
流るしるよおろろうる月
証脚しかへも夜せの夜もすから
羽根のあひかるよ庭ぞる露や霜
大佐の汲干る侍もあるなり
日行るつきりて立し　陽炎
角落るのろりしる麻の衣
一夜しよ曲のさくらさき
秋の田数へかろうの甚をかそ
深厭まりて外吞をさる
おもよへ乳ハ茶も去つけし京の春
又ふハ大やまり　汲さくれ
隠るら横織らけし　勝抱平

三上祇丞

一よちらひの象戯まけるき
ふまよ世をさけしる山法師
枕せして揚ひさひきる
前明の節よ己うれらく汲おしき
暗君よもち（まとせの）山法師
ふ居よきふうしかの人の面
たまさかて御柳らしし町の出坊
下々の象戯の飛車をおしりる
元母ら元ぶよあろふをとろう子
かおんの面へ大笑て月をあけて
戸浜の蔓かろりよ滿うけ
実横の首よ底くふる星かゆくと
冗生ん主甲るあれ凡のまま
言われと萬楚くる壁の星とゆくと

の句揃ゑし
中すかに從へて
作りておかしき
あれハ返らく
手妙なる事

むかしハ廊下あまく新造
芸妓の情なま今佛の声立て
新造の其の沈消につくねん
まちや一寸わたる紀の匂ひ
つくねんとして舞る女楽する
みえる鐘を聲くん寄まよ
唇向ふ人まるうき唐人踊きまり
浄味方といつも七藩の勇士を
毒あるハたえこの煙立ち
浄いまをとやせと官を懐かれハ
多数家の漏のあさく
要る來る佛を枕かへされて
勝ちにかゝる医者の匆舞
盗人の種さへ見ぬ世なりけり
放題ハ弱いのもと留らす
東かれや年をとむけぬめしめ

脚足亭

句頭に仕立
京地名よし
中まと云字を
交て句作して
いよく揃ゑし

梅　梅
母　尼
田植　唐詩
楽器　届文
藤州舟
買々のの句揃ゑし

藤中溫克

紋ハ赤く月立つ挑灯
婚礼のまり成るなり橋
修よ見さし入ていつを見る
火禄の恐くなるし　曙
世かて寄わとありし高宮
世中ハ婚よ小池ハ桜色し
備てうりのころ　大寺
荒し名の稲るもぬ志賀の里
子をと流しるたまし舟より
涼慕へ舟る帆をたくなる
表口同士札所うき
傳為の見る先生のうしめかり
朴人なりさしかるつくみくさ
祇をとてまて豆腐　新みたる

ミけてねぢ屋と
きひてよかり
あるへしそのみ
男竟をえとし
て句作なく作
るなす一なり
跡もあるへし

わが寛すて旅もえきさんし
まだ夜しろよ緣側の夢なけ
竹縁とのまし蛇の這ひより
井士の果しやとやし脚の坊
情よ魚さし入まてとりきうね
火神の昇く如しあけぼの
大路の奇りてみかりは上戸
女ぢし願ふ逢ふる宮折
妻もそなありて御き鉢扣
灯篭なる寄る宮の太秦
泳まる月の下八田や畑
冬の秋も言まてちまふ清近家
かのく醉よ他身よ下り
枕川夏て油の虫しやとて
いろく松のいきさよ紀蒻
其陣よ襌の下のたろもゝ人

露哉

一体句作拵へ
まる句よし
業と詞後然
源氏なと許方
まそ拵ふし
局（女郎）人名
日の亀　神祇
時鳥　小夜市
許名
ちやく拵ゑとよ
句多し庵る

北在轉

つかる間ちあさしみゆく春
椎見た末松まなき紀とねもと
まとゆふくの庵儀別よ
まや淨屋舟ふ八景ある寛
餘花と猫曳尾のまよそろて
先屋拵るあ星も坊（ゆき）
溝きせらうよ路の寺所
夕ぐの朝のし鞠の蓋かしと
庵花もみく一生ろとしく
鳴門なと唱て鼓る　佳氣
志ハろく八月も君うる天川
交野あとらの保きく寿
文庫の薹よ今と寿へる
あへある總守也御のつこと寿

手招せし人あり
味ふ三句の法
考へ述句をと
作りやすし
換多し
兎角古風で
讀合せ一なり

行てみよ新たなる人の淋しき
草庵封しる念佛いふ毎
え字落書との尾つゝ上て
代官様ハ河の坊の鞠
かふる男をいすみてせる
ところ空く見ゆる巨燵
待ちの欄に插そその梅さ白き
ひまもく約て眉に盛く京
雛は床のうちに来は来る庵
居ころ山ハ深雲のさるかうし
錦ひして袖に来る　蝶
又啞の不孝と差て泣かせなき
山のあなたへ月ハつるなり
茶菊に罠とあれハ蜂のいるま
子ひとつれのいく　秋情
留の額もつめたる筋　柏子

神田庵

一体強き方すし
當時ハ世り多
る句に手招あり
又数　述懐
誹名・梅田
孝行　妹の許
見そとふ後見
もえてと附三句
のつくろむつかし
三句なすなる
作りて換多し

木村小知

むしろ見き梅の先まで行ぬ如
植さしけむ詠めり晴天
斜をよする帰帆待けり
出てに異見一領うやくし
孝行の昔ハ兄てしも貧し
おもふとすれハ我伽の身をさひ
此んさと呂ふ入梅の文読る
旅の暮覚して蚤ハ述なれり
光見つゆおそろ　有氣
迷ふる芦辺として鶯舟
下草の画きし月の来る家
酒あれハ味噌よりかく　山桜
果ハ数ふうらし　吐翁
言るしてと大縄きし　伯山

あまり句と侍
たハ旅ふあまり

石壽觀

一体句和りれ
往之な髪点の
あまき許多そ
句作りをへて
とうくえ句の麼
併を考へまして
罷筆然の句
又い時寂ある
この句招みし
思そといへる花
あらしあるい

別きての曲折しく次足して
瘡よりうき霊の剤限
二三丁加て浮気骨のこゝれ多
のさへる薪をえとゝる
折る月ハうつさし旅の先
墓うけあとろの永き河の塲
附るけ竹の火の迹ちうき
秋の麻海をひとつ押出る
化ぬと名の外の瀬出る
うきろ深く振る看病
笄捺て丈首指る狂家よさ
辛子の母も元辛子なり
秃食ありもあめる衣原
さとせる作りえる古妬より
折をえる柳みやの乙ミく
常のゑなしもありこミ侶

壽　秀国

常火のまくあふとうき名
望着く京の音の楽しさ
本従の枝とちこえしう
短礼のむかし浮ら底古侶
下戸も吾うハ歳し三寸
紙髪の説てもまきのまてさき
流気も部留古加縁の去
積着かりし旅室の小細工
互の原くよけハそんなと気に
只うけむいて除夜のけいさい
節ハ蕎麦修子もさらすう
名乏河の箕世をへる伊勢まで
おうふしう額ぬいえる坊主庵
流さ孔舟の幟うつくらく

此の句作り中より
よく点ありし
むしろ早なる
句に無き
点あり

花ひでも師走の京へ足一ふ入り
松やしきてみせゝらく
ゝ神慮ハめつと者と出ひとみて
たのもしくつくにみてしけいちい
丹波の老栗ろうり降口
かのしふをゝるしく凱陣
従石と勝とみくてへるらし
皆中のなしく足もる節ハ縁
あやなきハ若ふ中村の小月ゆ
まりしきうくよ母の月と泰む
紀そのちしみ質と知る良く
千金なかへしる虎のわりひ出
蓮生の実をらくき衣まゝ
男まかりよ妻と春し尼
ひらかゆく金屏の月
皆母扇してえの之井の秋

立地菴

一作の句ありて
作を句ゐ為らき
あよしく実情に
その生とかしこ
あるも句作り
すら様みし
大坊主　聖人
御局　神祇
天教　食穀
蒙鞠　母
新造

司馬可因

蛙鳴寂原に反りむやて
きよらり家わしきんとまつ寺
果とハ才先ひしわときん
旅栽畑をとへるもあくまみ
みちの記の文見つきうら
中庵の荒刈る地杖あるく
根袖を結ひ合せて祥るけ
小太刀てかるし詣る薙刀
きこしと手金ノ控て係ゐ
僧とゝ食うれ呼ひて会ふ
いりめしく篠をふむ逆山峯
師匠ちよりあしる　点ぐ
この言偈ても无とゐふる士
豆飯ハ?をまる門て仕出かし

見らるゝといへ
ども諧方そ
春あるまじ諧
語を考へし
是といへる句
を賦し一絶
むつかしき物し
偶の諸名句
よし

若きの振とし若るこそ是萩
奥歯二本ッ今うり是
一分ばし又二分がしてうれの是
是うしろへとて腰をよろきる
は夜ながさを漕く蛍灰
妾の姉も妾なりけり
旅寝よ鳥の一羽秋の了
清下屋敷の馬場て大晦
勝とふるしく要食一盃
霰る時はさびしくしる嫁の穴
ぎりしく氣び候て美人
古も浄閣も能さるよ云号
猿戸あまり子を寄せぬ虫干

五

さるもりと揚除帆巾にて涼しなり
笑ひよ思めつかめぐり袖
舞夜の側へありを寄せける

過來菴

おもしろき句作
してる句に拍子
あるやうにせよ
に俗語を用ひ
て頼むべし
鄙俳　樋丸
俳忌　中居
人名　茶屋
公事　祭
霙などの句等し

志村常仙

前句まではあい日の脚
線をさく壮とへは候ふちの都
西國へゆくと京でしてやられ
さりとらひの仲居ありし
風雅の善き涼しき奥座敷
大臣ともの書置し　霊山
荒果つる軒をもろしる本意
座禅の膝へ蛇落るなり
月中より上る有様の塔
新あらん水底の月の森ずし
神楽を集る禊きるこそ
是よ灯火のくらむ　大寺
いけこうし炭壺よ白蛇かゝると
深よく仲居の仕るやおしおる

よかりあり手本
意の句手し
推敲しむ游
ひらう事一寺

圭

ゐすなき地巴の狐火
神前のうかくちよと年蹄へて
不ころきらえと立し稲原
中るすのしさあしく去て古狐出て
家よ遊ひ旅亭の囲炉裏
る迄の煙草留守宅ハ楽する
いましんて吸付煙草あらう
廓しと祝いて君ハ至うしく
此先よ芝へて宮ゝきぬの秋
んろ見ぬハ見ぬまでの借
すあきしよ路の懇意
室入の家うれるよみる因両
手の国まちの為かる豆鞘子
丈年し仲居のあろえ見事
丈まするの八草烟中入
子の横増あく如之し抱くえ

十花亭

句作中さうくなよ
してまうく細き
見えなし猫よし
日光地名軍
神祇　天象
妖怪
訓方むつかし
論語の句のと
よよからあまる

木村金洞

房の秋せらるき江戸も哀く
喰れをとむけよ蘭く竹市
須あらせて云よ大宮司
まる年の暮法不旅といふよう
売もなあく陵の肉
枯枝よ乾鮭ハく月の秋
積よんのふそき虫の声
売てのし家よ古物の泥をおし
高裾や扇を裕よ紫積て
市よ蛤れよと表まろし布
讃ある宿もお年を数ろ虚
のめし角も肢や徒かきと
売トのかふこよ別しハッあまる
郎しし・義年迄しうくから

忠孝の句
物語の額と
なるへし
名所
附て味
あるへし

ころもてまゐるむらしかつし
墨染のすゝつまなき返事より
團扇のぬるい秋の日
石斑魚に口上書か惜しくて
蓋物の香の句に短冊
情なき人の家の物くるゝ
豁菊路の振舞掃除
辞ハせし酒をうしむ女房
日和のくるゝ魚の家
宗椿の膝をさしのらむ机
末の子を江戸へ出しうる舟便
天窓剃しる　髪なき　夢
その母の奥に都の御遠
困まへ老ひ　髭なき　素
店貸古きもと抱夜討家
ふみうしとなりなん和しの文

雪堂

句作りをすゝめて
春蚕上の出様
なき句をそへて
あり京地名今
に換みしむ
京くりしられ
附方むつかし
買物　不叛
食喰　宗治
説縁　浣
人名　鄙作

笠家淨阿

んの出もおしきいくさ場
つめてもおうろなき文のめくぬる
おつかつしみ九軒ふれく
重荷しるゑを立てゝもそふ味
立てをうきみとせ芽持ちそり
たひこい西の曲物に橘細りて
又女子調子もつの展かへし
着をを待つるの乱さといろく
門札みまるく旅氏将来
引かへて弱猿の近へ釜走る
かいえを写るぬきあに棹うけて
まのうしかつし種物の条
揚屋写子よるるもぬなく
炉唄をならべとは楽の取りしき

案ずる　單
こと外たのしく
道連あれはこそ
この句のまとまり
もくろみのこと趣
まて隣家あれハ
事たりかゝく
なるよあるに

袖川ハ和くそうつのうてくれ
足爪たつる雨の浴衣
坂の背の画うけぬるすりめん越
泥とかきぬる乞食の賞とく
うしとみしは八佛の教かり
無き火み原と知りぬ大寺
かゝみのせて床をとりまする
埼ちかくさく一挺の新太鼓
ちなみの脇にせまき揚屋
様子もての坊かゆるよる客のくる
病上りかり風ちかまゝしむ
舟出けさ上り塔ちかき虫のしん
婿入の足ハおゆしと母ハ傍
多葉の味よ涙の宮杭
隣の霧の台たのまし
二人目ハ座候のうつる術さしき

雨夜庵

まず一世話すると
なをとるひ句
指をさすく
句作を悟く
もへし
産の鴨　京　地玉
江戸不名　蚕
素秋　時雨也
庚峯　縮市
酒のうつき

峡田菊堂

一あれつるよかうるむくる
忘れる笑みに恭れる焼思の中
懇とまうるゝ浮世さしき
揺れしるあろく中の出座を
凍えに梢して雲齢の穂
再の家出座す宮の社足へて
た子をとせめてまきふの花の忘
たまよ鞘るの山ほうらき居
午時花咲れ者のまかりし
般若よる行井ぬきし排の夜
様翁のたゝう文を仕あける
凍の浮みとも寄き右号
ろくまふ者の長者箋春
喰くやちかゝりて別くくる

ところ〳〵に拍子
はづるゝ身一し
中〳〵化尼の句
穂かし
附ごゝろ万葉
定まらんといへども
言ふ点附ごゝろ
見て居りぬるに
まゝあり

焚火の烟新にむ〳〵し
年をふる舟旅せる子隨と奏き
生のもりわと世ゐに玉かし
秋の田の白妙たちぬてかさり菜
八重る一重は花む原中
まく神の来る実りて佛の座
雲枕より古るき本堂
五月晴森ても不見ぬ川支ひ
次第〳〵に鯨も寄りく
近頃は湊も新酒の廣斗包
並の灯の胴よちろ〳〵
氷貝の身を蒂て拭く宵祭
干瓜とまけく迄入古用干
ちく〳〵世の花見舞医者
くふの白和ハ風に寄るなり
浅草寺法の分まなく画まる

星霜庵

一作中まゝうたに
句作をして
恩宅　久教
基　和泉の浦
誂添　細代書
児　梓
渡守　関守
とろ〳〵若き句に
る掃あり附と
句のゆるし流れ

熊谷白頭

孝なれんしと思へいとこう
峠を拂らんいとまする士
竹格子にも格窓も役たちて
空割る児に着せるまゝ
花の葉ふる続きに新し
毎毎〳〵世のあまる　渡守
居眠る羽をもなき蝶のさま
仁王の前に居る緋ちん笠
裏なら〳〵いそ〳〵年寄
細代書るほくせある男こそ
笠あてり御まちたハこ人〳〵し
田植ゑしつむ　兼平が娘
伯父さまを申し居ぬあつるし
児も〳〵ほし　奥流添の寺

悦ばしらさてきこゆ黄昏
夜からは鐘かとつけて詣る人々
寺にまうづる人々に大慈
見ゆるも梢おそろしきさへ念佛
尼の声々雀楽くとく
年々のお法会ある法の場不
いとゝく浄しき秋のゆふべの音
降りも止みて稀にやる
つゝしみてみえへぬ元日
参詣の一人宛出る松の脇
家尻を掉よりて取しき
さしつけて床をとるは切迫ぬし
講釈後から掉尸きうする
持戒の寄とふして此の頃
北辰よりは信なき處にし
雉の声　山御堂りこもし　友所

蓬莱庵

一休なよ句仏
きえし句中に
いつもりと婦人
泥坊　佛達人
母　大地震
生まれ　死ぬ
寺一つ罷多の多
かくあり中にも
大文字に遊び来
るく捨るし

田島芙天

葉月にすけは挑灯のよし
よれみるいつも降りし此の夜
日暮りは来る帯る小六月
要一ありし　仲居あるらく
出る月に頼の月ふたつある光
文字と流せし菊々男の燃
せしく手をえぬし　大文字
辰へのうくしこと手ふしろ
ひさし燈の高うしてまし
代々へ伯様の気をといひけて
燕も苔も夜の花　白
野えて像妻舟の初しし
昔の外をやく掉める乙散
趣行春日に頼たるまし

な諸ころむつ
かしきる由らは
ま作きる句み
ゆるあるゝ作り
ゆるくさす花
合はよし

名のりすべく小筒ぬくとき
此まちの母の系ひハ女延まて
あそりかりよる蔵の炉斎
本の名をあらたとよハ別際てし
旅俳諧家をその傳ふるあり
詩死とし懐きハめて一かなて
吉原ありしてさ好筆債
もつらき務よ見くらく西せとら
画解して舎之低さるもの音
眉をとかくして送る衣し
座るうそ秘蔵せし御猫
お後の又似しあとた地底
十年あそ蔵よ出てえりくて
中むつましき女　見男
厂ヶ侍るとかむくめる勝
まつときる所くよるき寄生座

矩久斎

むつしなる方
あり京地名所
よよしを不知の
句摸るへし
神祇　尺教
生類　植物
夏句　部作
賞名
その外謡より
又ハ細き足出し

本間保牛

きの南に銘のとろける
須磨の浦りて抱くかに私言
本読さして伯ハ居眠り
手筆袖の脱く造合也
書つゝ墓石ときの竹枝わ
牡丹ぬきんて喋る追ハなく
かさくてハ文吸筒とかりて居る
連る仏師て日のふけるる京
鳴さかし斗絛とは揚るぬまり
潮戸もちきけいせいの船
きちあ古ある月あまねて隆つきき
さふ子の吉恵ときて居る
宮の女のかくり命かもるゝと
偲偲吶下よよえ由るも上まし

あふしてうく
附やう流れ
みかしくり

書屋住居も帰魚待つうち
晩ふ滲る子女房の片頭痛
路阿み列そてにえ気うせてく
風干加番播の香気ら多
後の彼岸の浮く晴天
説法を聞く皆女か袖の香
村ふ名ある寺の鳳泉
大蘭刈る読み田螺のかゝ夜
炭売の子の迷ふる否の日
再番と諸合ん さゆきを脱かて
情気しよ泥を吞出かて
いそけふし井筒ふ首つま焼合
結日和風をよとかいぬかう
赦と待つ身へころくるかい雀
　霧まはとして凄き月哉
鉢祖父の声のせぬ夜より

伽羅菴

一作の句法ふ
活あ方かなり
百万点の気味
まても作を下
律まよ中至
風巾墨居
照射みよる句
換かし志の句
まようおかしみを
の句みきよう
ありとうく附

小栗旨原

住居八ッ山まで随く役ニ務
近眼ふ近しき眼鏡なき
米を梅のまを披抄りかう
昔知の名まる寿も気の通
役者見る桜田も只二年め
馬のくせりちと答を馬梅杓
訓る句もおくも夜伽の名き
二つて近る名年数の楓子
志学の小楢のハよき池の露
君寄かわとよ知らし孫兼
形代を流しさ読て川施餓鬼
殊義屋の門へ玉味噌を二を
活の気よ附句のさしあなき
神道振るへき底法の淬究

寿八一

尾ゟりも佛きつひの涼しくて

狸らん〳〵其の足らぬ庫裏

狂歌て返しを蜷川ら筆

猫の爪やところの子ゟ虫いふて

鉄炮い井戸の娘ゑし賣居ぶ

氣ハありなりつ妹ら院号

井戸の着ハ夜の室咲

隙月ゟきつとら妻の物かすひ

流れ大ま。ら性からさよ

さくさまセゟ夜寒の作の封文

雲ひとつなきなふの晴天

伽羅の香も新る樓船の川施餓鬼

家隙き旭ゟ燈の出るなり

原よかくるし乞食あやしき

きの手るさら茶ゟきゝしろうく

物の怪と半院の客ゟ白ハせる

柳橋庵

白作者ゟらよして一作面白ミあり閑情なる白ゟよし思逸ある発句揃ひとく妙第一の名搗なそ白作をつし吟じの白よき稲あり

神祇　天狗

妖怪　軍

大町連馬

呼ると弁慶しるさん左様

浮居されても止ぬようし

老れり雑ふつのよき雲

出来栄ゑ発想の面白み気で

笑をとられて團るなら

凡巾あけて堂へ足代りけるかり

其居まして今月の一まく

主数喰ゑの中きたまき

用の本き脊戸のメり八景行よ

好事し古きひあの侍正

蕭坊主の肩ゟ折しきあけの紙

お腹立めして本二馬まゝしある

出る頃来樋ゟちを被き

腫物の如くゟ毛見をあつめて

源氏　信紙
色外にあく
乃至あつと以
とる附かる
むつうしられい
きんとみ江里
古第にかく
ろの手あと江
を世話する識ハ
おもしろき名古
よし

杖すりかしと勝よさみずし
賭ハさる基佐ゑそれぬ里
日毎よ声のはしくりも
世帯しつま巨雄までぬ娘り許
死にせ女房よその世の下女
もつうしの芝居の涌よあつたし
世帯のあるまそくさて来るし
のひありーし　え嘗
まうしき上る毋の周と病む
素さる与に鉄炮なけむしそ
ち用そどまかしぬ花倍
色れか能ひらちと咲されつ
眠る夢と寝童同士のつき合
稽抹几の友呼しもる
母肉そろの世さと看病
娘より分るまろあると抱きろし

夜月菴

一件白中と生
よ佐ミ様もの
生死の名よし
娠　人買
船中の[illegible]
売　孝行
脇所の城
生佛　草の居
営人　囲者
そすみ附後え

水野山花

諦まねハ在古き山ハ寺家
大海る波の明けまず闇てある
占いとえ走つふ昆よする伯母
味さきを明の元を立走り
案うよ傍ふ唐室の蜘
多よ露て厩うる哀き田中敵
白鳥の墨よ陰と安房上総
舟まつまつて波へつく〻舛流
高よなりもく須戸の浦几
藻物の序よ届く綱の官
出るも夢一つうき旭け
自判ある帰へかるくと蝶
新舘の何ぞるすも怖れし
山を廃へてま耳よ斜く滝

道見えかくゑ
中ますゑの句
桂乃の句
沖一まり

箱根おろしも濤き堀川
葉えみあるかと切まる刀研治
今の世ゑの島と幸ちらる
ゑるとさハ社の壹の舞詣りて
新世帯のへ脚またへより
かしきと日と逆呂をあらひ髪
肌脱る女もえめる隅田の春
幸So鎌お笑きれらし所
祝中お爲ち居かるもえめるし
よりつらとりふ鉞ゑの外
山原ミもあらはる房建て
出も意ろくと家禰み勝つ
ちよかゝるる作ゑのうち
意角み杉戸の新利をと取て出き
痩寫さこのかしうすらく
つくも愛他所の遊み元揚て

光風園

強弱ゑらくし
諸国地名　買色
尺教　植物
書画士　温泉
牡丹　水辺
愚意　庭院
それ外生といふる
道見も尺へ入
とくゝ毎の句み
換ふし句み

交　寛美

箕原も尺しかをえ来るて
所さハ柚味噌の句み倚下の秋
会入て謁る泥ひし　四称律
馳ちくるきは服をとつ節
あゆうくみ林も角新のお玉琵
猫みしつきおきて梅の雲
芋の丈よりもあまる花のし
子育のあひて来るを世ろくし
行脚とゑあて友吟をとまる
肌るるみ冨士も學者の為えへて
時より為ハ方みへ風のかき
柳の花押く後の売舟
薪信伯み盃のうちさき
底々きハ尾をとこ出る　柏舞

おりくと貫一
しんそ自己より
と云なへし

吉のあるよる治の戸ハかつさひし
内にも出ハかる流りの浪
氣のつよさよ年もひりく
隣の子供娘の火よけ送られて
年寄の叩れめりせきやきくて
ありゝ子よ家る雑よ念仏
よほどるよ酒去利くへちやし
名虹よ仲居か下駄をかくひろけ
あり世話してお八不自由
へよ後日のうちく早し日の嵐
久くれけり箕月の新
近所も無入の日ハ見さりて
まての氣の隣し 朔日
孝行と兄中々兄すねよ真隣
合業しうと親当て中きぬ
苦界ても別しと孝の行便

玉田夫

あつらまる白似
まつ
鄭仲 生類
軍 足數
揶筍 妖怪
日嵐 紙治
姿鏡 洗贊
下称冝
與列地名
兎角道兎あり

小栗易難

あすしつくるめりし 傾城
斬々ハあらきぬりと睦言よ
手悪き表裲の寮の玉よ瑾
古用兄弟しもかゝぬ老僧
おもりぬ人の中夜さある
年の上芝居もえるよ眠らるく
若の目泊鳥の羽をせきとめ
鳳狼そし落るも石上寺
日の出の出とうよ為る鮮
ちらりと酔か邪ナ全自德
雑よう帯ハうこくまり山
春の也よ厠 寄る女つま
占をせる底亞ハ毛兄のるりよ入て
さりと女房のるりを学數

といへとも隠者
そゝるとなし
句におかしき
も頼なし此例
何をもこゝろの
侍る老人見し
惜しも隠居
そゝるとあれハ
重色のまゝう
咲けるも所ぶ
惜きさへも句
も拾ひるてし
んとぞいへりし

嵯しく庵中しらきしの中庵
山川の曲つき所る格をとりけ
いかく亭のいさきよき跡
も陣の鐘の下のさらさら人
誇く濃く夜芳する山の勝
末ハあとさし詠筆と清子
まくしと連子へあつる宿の言
色ふ庵ひそりよものゝ中の畑
佛居の勝の一首ありうき
姿境に移る小春の桜語
こゝろ〳〵と根究をと出る
も系するを老まて曲る二首隠
田舎の伯母と居あてより
出接ハ雀衆をめる今年縁
も酒果て居を仮格
え宮く某子亭の泉見へて